
Monster Hunter!

琉姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M o n s t e r H u n t e r !

【Nコード】

N 7 3 1 3 L

【作者名】

琉姫

【あらすじ】

壮大な自然。そしてその自然を確立する弱肉強食というシステム。モンスターと人間の共存する世界。人類の歴史は常にモンスターとの互いの命を懸けた戦いによって

育まれてきたと言っても過言ではない。そしてモンスターにとって脆弱な人間は

道具と知能という武器を使って強く大地を踏みしめ、生きていた。

そんな世界の都会とは呼べず、田舎とは呼べても辺境とは呼べない、機能は都市並、けれど人口と

在住ハンターの数は地方の村と何ら変わりのない風変わりな港村口クシエ。

天然の絶壁が城壁の如く村の周りを覆っているおかげで平和な暮らしを過ごす村人達。

そして黒竜の呪いを受けた　ハク・スケイス。

彼は呪いを断ち切るため数多のモンスターと対峙していき、精神も肉体も強くなっていく。

そんな彼の周りは美しい女性陣がもりだくさん！？

と思いきやなんと男性陣ももりだくさん！！

極限までモンスターハンターの公式設定を取り入れたモンハンを知らない人も知っている人も！！

どこまでもモンハンの色彩を濃くしながらも、主人公の人間らしさを描きだした

シリアス系ファンタジードタバトラブコメディー！！

作者は平凡な学生なので矛盾や誤字、はたまた文章の量の調節が至らない場合がございますが

そこは厳しい目と生温かい目を掛け合わせた皆様の目でお見守りください（´・・・、）

もしも誤字や矛盾しているとところなどを発見致しました場合はメッセージや感想にて

指摘お願いします（´・・・、；）

でっ、でも普通におもしろかったって感想もほしいですからね！！

（´・・・、）

ブローグ

ドンドルマからかなり離れた風変わりな港村ロクシエ。

海に面している地域以外は天然の岩盤でできた城壁のような絶壁に覆われ、

モンスターの恐怖から怯えずに暮らすことができる平和な村である。古龍を撃退できるほどの設備はまだ無いものの、その防衛力の高さから貿易、商隊の中継点として栄えている。

そんな村でも稀に商人が遭難したので搜索してほしいというクエストが依頼される場合がある。

昼間なのに騒がしい酒場。

ドンドルマやミナガルデなどの大都市のギルド直営の酒場と違ってロクシエの酒場は民営である。

といっても中はハンターだらけなのだが。

それに村の酒場は大抵ギルドの受付嬢がいて、ハンターを管理している。

酒場の奥の大きなクエスト掲示板の前で貼られた受注用紙の前で腕組みをしている少年。

髪は目をあけると透き通る銀髪で絹糸のように細く、やや長い。

10代あたりの中性的な整った顔立ちで、よく女性に間違われるのが難点である。

身長はハンターとしては年齢標準の170cmあたり。

数秒掲示板を一瞥したあと一枚の用紙を剥がし、ギルドの受付嬢に渡す。

「ハクさんまた人助けですね。たまには他の人に任せればいかがですか？」

いつもこうやって絡んでくる受付嬢。彼女はギルドの受付嬢の例にもれず可愛いのだが

小悪魔的な性格が恐ろしい。

「商人は洞窟で休んでるときに襲われたのか。ま、大方ランポスの巢に立ち入ったんだろ。」

「うっはあゝ、よくそこまで分析できますねえ。まあ実際連絡が入った時、状況はそんな感じだと

いうことでしたけど。」クスクスと笑う受付嬢。その笑みは正直怖い。

「周辺の大型モンスター目撃情報は？」

「観測班によると異常なし。ドス級モンスターも目撃情報ありません。」

「よし、ランポスなら特に装備もいらないよな。いってきます。」

「いつてらっしゃいです！」

元気よく手を振る受付嬢。

普通にしたら可愛いのに…。

そんな思いを抱きつつ、俺は商人救出クエストを受注した。

第一話 小狼と晴姫

広大な空がオレンジに染まっても、ガヤガヤと賑わいを見せるのは町の酒場である。

ギルドのクエストの契約、および受注を行う酒場は、依頼を受けるための巨大な掲示板が

奥に腰を据えている。そして俺はその掲示板横の案内娘達のところへ向かっていた。

「やあ！！その君いッ！！ヒック！一緒に飲んでかないか？」

俺へと声をかけるのはランポス装備に身を包んだ片手剣の男だ。

顔を見る限りかなり酔っているのだろう。ジョッキを振り回したり、歌を歌ったり。

果てはケンカを始める輩もいる。まあどこの酒場も同じような光景なので見慣れているが。

周りには初心者ハンターに支給される軽鎧に身を包んだいかにも

素人な男たちが酒を飲みあさっている。彼らも酔っ払いの行動をとっていた。

「いや、俺はまだ未成年だから…。」

「そうか…。」男はクルリと背を向けまた酒を飲みだした。

未成年であってもハンターは飲酒しても法律には触れない。

だがこの熱気と嫌いな汗のにおいの中で俺は酒を飲みたいとは思わなかった。

ギルドの受付に付き、いつもの受付嬢に声をかけた。

「あら、ご機嫌悪いんですか？お疲れ様です。どうぞ、キンキンに冷えたハチミツ酒レモン割です。」ギルドの案内娘がサツと飲み物を差し出す。

「ありがとう、助かるよ。ところで例の依頼だけど、…ゴクゴク…ゴフッ！！」

氷点下に近い液体をがぶ飲みし、俺は盛大にむせた。

「だ、大丈夫ですか？ 連絡は入ってますよ。雄火竜リオレウスが現れたんですって？」

観測班の連絡では当分はやってこないはずだったんですが……。案内娘は考え込むような顔をした。余談だがギルドの女性は綺麗な方が多い。

どうやってスカウトしているのかと思うほどだ。ついつい案内娘の顔を見つつ、俺も考え事をした。

この受付嬢が大型モンスターが出現しないといったので俺は用意もせずにクエストを受注したんだが。

今回の依頼は森で遭難した商人の搜索だった。

俺は脱出経路確保のためにランポスという青い鱗をもつ鳥竜種を掃討し、商人を保護した。

そして、^{ベースキャンプ}拠点まで戻ろうとして脱出経路を使い、^{ベースキャンプ}拠点に戻っていく道中、奴がいた。空の王とも呼ばれる雄火竜、リオレウスが……。

商人を、^{ベースキャンプ}拠点へ無事脱出させ、救援をギルドに要請させた。

俺はというと救援がくるまでリオレウスのしっぱでなぎ払われ、ブレスが足元に直撃し宙を舞い、

最終的には空中で体当たりをくらい森の中央あたりまで吹き飛ばされた。

攻撃されてる途中は風景がスローモーションに見え、ただポカンと口をあけているしかできなかった。

（結局はアイルーと呼ばれる猫にベースキャンプまで運ばれたのだ）

体の怪我は擦り傷数か所切り傷2か所。

受付嬢もビツクリの帰還だったらしく、酒場でこうやって他のハンターにも誘われている始末だ。

ああ、わかっているさ。他のハンターも褒めてるんじゃない。

「次は死ぬぞ、お前。」とバカにしているのだ。
ハンターの社会は強さが物を言うのだから。

「でもまあ・・・無事でホントになによりです。もしあなたが殉職しちゃったら

私は今頃呪いの受付嬢って呼ばれてますよお。もう10人も死んじやったんですから」

それはそれで十分呪いと呼ぶに値するのではと思ったが抑えた。

「とりあえず報酬金の2000z^{ゼニ}です」

「ん、600zのはずだが・・・」

もともとは900zであるが救護アイルーの手を借りたことで報酬の3割が彼らの報酬に充てられたのだ。

「リオレウスの出現による違約金です。」

「そうか・・・ならありがたく貰っておくよ」報酬に手を伸ばす瞬間

ガツタアアアアン！！酒場を扉を誰かが勢いよく開いたらしい。

先ほどまでの喧騒が静まりかえった。ほんとハタ迷惑な話だ。

ここからは遠く顔は見えないが入口に数人立っている。

「あれが噂の・・・ロックラックのハンター・・・」受付嬢がつぶやく。

そういえば別大陸にもハンターズギルドが存在し、砂漠のど真ん中に存在するロックラックという城塞都市に本部が置かれているらしい。

一行はまっすぐこちらへ向かってくる。

先ほどまでバカ騒ぎしていたハンター達は、ある者は畏怖の顔を、ある者は畏敬の念を表にして、黙りこくっていた。

だがすぐ喧騒は再開した。

「じゃあな、リオー！！またどつかで会おうぜ！！」噂のハンターの一人がそう言い瞬く間にいなくなってしまった。

「ではリオ、わたくしもこれで失礼させていただきます。お気を付けを・・・」

執事のような口調のハンターも洗練された足取りで喧騒の中へ溶け込んだ。

そしてリオ、と呼ばれたハンターはこちらへやってきた。

「あの…、案内状さん、私ロックラックからやってきたリオ・ルクスライトです。ギルドカードを持っていますので照合お願いします。」

リオ・ルクスライト。鎧から除く少しピンク色の白い肌、綺麗な金髪も長く、

顔もどこかのお姫様、といった雰囲気だ。おまけにスタイルも抜群、文句なしである。

「はい、リオさんですね。これからよろしくお願いします！わからないことがあれば

隣のイケメンなハンターさんにお聞きになるのがよろしいかと思えますよ（ニコツ）」

「なツ!？」

受付嬢め、覚えとけ…ツ!

「あ…つとイケメンかどうかはさておき。俺はハク・スケイスです。今年17でまだまだ新米ですが気になることがあればなんでもどうぞ?」

できるだけ笑顔を向ける。だが首周りは冷や汗でビツシヨリだ。

受付嬢め…ツ、視界の隅で笑いを堪えてるのがみえてるぞ!!

「あ…、あのツ!!これから一緒に狩りしてくれませんかツ!!?」
リオが顔を真っ赤にしていた。

「へ?狩り…?」聞き返すと視線をそらしながらうつむいた。

「やっぱりイケメンは罪作りですねえ…。今日はもう遅いですし少しお話でもされたらどうですか?」受付嬢が言い放つ。少し棘がある気がした…。

「おんどりやああ…、んなカワイイコつれて狩りできるとか生意気じゃねえか!!!クッソオオオオオオ!!!!!!!!!」
話を聞いていたのだろうか。ゴツゴツの防具、バサルシリーズで身

を固めた男たち・恐らくパーティーなのだろう・は次々机に突っ伏し泣き始めた。

近年までは女性のハンターは獣のような男性ハンター（同じ男であることに軽蔑を感じるが）に

強姦されたり、見下されていたりしていた。ドンドルマでもまだその空気が少し残っている。

だがこの村にやってくるハンター達はなぜかやさしいオッサン気質な人が多い。

といってもスケベ思考なハンターは多いのだが。

「だあああああああ、うるせえッ！ 寄るな！ 恨みがましい顔でこつちを見るなあッ！

うう……、場所…変える…？」

野郎共のむさ苦しい嫉妬と怨念とその他諸々が混沌とした闇を醸成していく酒場から逃げ出さなくては！！

「はい！」 安心した笑顔を向けられ、不覚にもドキッとしてしまった。

だめだ、これはよろしくない。非常によろしくない…！

俺はリオの手をとり小走り気味に酒場を出た。

もちろんお決まりの冷やかしはあったわけで…。

それが俺ハク・スケイスと彼女リオ・ルクスライトの出会いである。

第二話 姫の食事

酒場でおっさんハンター達に冷やかされ、恨まれ、ついに耐えきれなくなつた俺はリオを連れ、

ちかくの小川へと向かつた。

「とりあえずここなら静かに話せると思って…。あ、ごめん。手…、痛くなかつたかい？」

パツと手を離して、頭を下げる。

「いえ、大丈夫です…。」

少し顔が虚ろに見えるのは気のせいだろうか。

「改めて自己紹介するよ。俺はハク・スケイス。今年で17ね。君は？」

「リオ・ルクスライトです…。16です…。はふう…。」

彼女はその場に座り込んでしまった。

「ちょ、ちよつと？大丈夫かい？」

慌ててしゃがみ彼女と視点の高さを同じにする。

「お腹：すきましたあ…。きゆるるるるうう…つて…」

グキュルルルルルルル…という可愛らしい音がこだまし、彼女は顔を真っ赤にした。

「わ…私旅の途中で所持金全部つかっちゃつて…、はううう…」

やばい、顔を真っ赤にしてうつむく仕草が異常に可愛い。

よろしくない…、心の迷いは非常によろしくない！！

「と、とりあえずウチにくるか？ちょうど食材を買つて置いていたから。」

クエストを受注する前に市場で食材を買い込んでいたのを思い出した。

「はいッ！！」先ほどのまでの無気力感はどこへやら。

彼女は嬉々として立ちあがつた。が、フラついたので反射的に抱きとめる。

「ありがとうございます…、できるだけ早くお食事をおお…。」
弱弱しく断末魔の叫びをあげる彼女を連れ、俺は自分の家へと向かった。

彼女をソファに座らせ、俺はキッチンで食材を調理していた。

鶏肉、胡椒、七味ソーセージ、を手早く炒める。付け合わせに砲丸レタスを添えて皿に盛る。

塩漬けた生肉を強火で焼き、こんがり肉にする。

自作の味付き食料を熱湯にいれ、スープを作る。

ものの数分で5人分の夕飯が完成した。

「おまたせ、ちよっと多いのは気にせずに。」

ちよつとの度合いではないがこの際無視する。

ぐったりしていた彼女は目を輝かせ座りなおした。

「わあああつ、ありがとうございますッ！！ではさっそくいただきますッ！！」

5人分といっても俺が作る量は屈強なハンターでも2人分で嘔吐する量だ。

だが俺はこの村一番の大喰いと自負している。実際ドンドルマにて開かれた大食い大会でも

俺は負け知らずだ。

だが、彼女のソレはけた違いだった。

「ふおんと、あひはほうごはいはふ！！（ホント、ありがとうございます！）」

「いや、感謝されるのは嬉しいけど…、食べながら話すのはやめような…。」

よく人から言われる

「そんなに細いくせに食った物はどこへいくんだ？」というセリフは俺よりも彼女に

当てはまるんじゃないだろうか…。

怒涛の嵐の如く5人分は消滅し、結局同じ量をもう一度つくるハメ

になっちゃった…。

食事が済み、口直しのデザートとして朝市で仕入れたミルクのアイスを

食べながら俺達は会話していた。

「私はリオ・ルクスライトです。ロックラックから養成ハンターとして派遣されてきました。」

けど出身はドンドルマなんです。弓使いです。」

と彼女リオ・ルクスライトはアイスを次々平らげながら自己紹介を続ける。

「俺はハク・スケイス。太刀を使い始めた素人だから君と実力は変わらないかな。出身は旧シュレイド王国、今は西シュレイド王国と東シュレイド共和国か。もともと流れのハンターだったんだけど。今はこの村ロクシエを拠点にしてるよ。」

この村、ハスク村は人口はドンドルマやミナガルデなどの都市には劣るが

それでも地方の村としては都市並みの機能を備えていた。

が、定住ハンターの数は地方の村並で、今は俺しかない状況だ。

しかし、貿易や商業が盛んなのでそれ目当てでくるハンターに依頼する人が多い。

「ということは旅してたんですね！？いいなあ…。」

「村から村へ。それで狩りしたり依頼されたり…。流れのハンターってだけで迫害されたこともあったけどね。まあ今の方が生活は安定しているよ。」

流れのハンターとは一般的には拠点を設けず（この際の拠点とはベースキャンプではなく、腰を据える村や街にことである）旅をしなからハンター稼業を営む者の総称である。

だが、世間常識と実情はハンターズギルドの管理、支配を嫌い、街や村に腰を据えることを拒否された者が多いことも事実だ。正規ハンターと違い強盗や殺人などを平気に行う奴らが多い。

最近の噂ではギルドの暗殺集団とも揶揄されるギルドナイトが違反行為を行う流れのハンターを間引きしているとか…。

だからといって流れのハンター自体が悪いというわけではない。ただ旅をしていて、決まった村や町に拠点を設けていなければそれはもう流れのハンターである。

実際流れのハンターの方が実力があつたり、名声が上がる場合が多いのだ。

そんなお互いの今までの話をして夜は次第に更けていった。

「船が難破して…。私たち養成ハンターだけでこの村へと旅することになっちゃったんですよ。」と彼女の話の聞いているとコンコン、と扉をたたく音がした。

「はい、どなたさまですかー？」

まったくこんな夜中に誰だと思いつつ、いつも通りなセリフを付きつつ扉をあけるとそこには

この村の村長がいた。受付嬢までいる。

「フェツフェツフェ…、すまんハクよ…。しかしさっそくたぶらかしておるな…！」

「なっ、誰がたぶらかしてんだよ、バアさん。普通に飯食って話してるだけじゃないか。」

年老いた白初の小柄な老婆、彼女こそがロクシェ村の村長である。

「実はリオ・ルクスライトさんの措置ついてなんですよ。」

おい、やけに嬉しそうだな、受付嬢よ。

「今村に空き家がのうてのお。リオよ、お前さんさえよければこの家に住まないかえ？」

「おいバアさん何言ってるんだ！！」慌てて反論する。

「いくらなんでも男女がひとつ屋根の下。」

「おや？お主まさか間違いを犯す気かえ？」

「ゲフツ、んなつもりはないっての…！」

「だったらいいんじゃないんですか？この家広いですし。」

受付嬢お前余計だ…。

「ウツ…。」

言葉に詰まった。

「お主はどうじゃ？リオよ。」

「はい！ここに住みたいです！スケイスさんと狩りも一緒にいけますし！」

「それにスケイスさんはとっても料理上手なんですよお！」

「おま…ッ」

「じゃあ決まりじゃな。ところで養成ハンターの件なのじゃが。このままハクに見てもらうのが妥当じゃろう。ハクも一人前になってきているのじゃ。リオも気に入っておるしのう」

「……。何言つても俺の意見は反映されないのか…。」

「フェツフェツフェ、気にするでない。ではそういうことじゃ。わしやこれで失礼するぞい。」

村長と案内娘は去って行った。

「安心してください。スケイスさん！私精一杯勉強して、立派なハンターになったらロックラックに戻りますから！」

リオはフォローのために言っただろう。

「ということはせつかく仲良くなってもすぐ会えなくなるってことか…。」

リオの整った顔を見るとしよぼんと気分が落ち込む。

「そんなことないですよ…。この村に寄港する交易船に乗れば一週間でこれからです…。」

俺は何を考えているんだ。髪をわしゃわしゃと掻き、考えを振り払う。

「とりあえず今日は休もう。狩りや村の案内とかは明日。

さきにシャワー浴びるといい。この部屋の突き当たりを曲がったら2個目の階段上がればバスルームだから。なんならお湯わかそうか？」

「いえ、お気づかいなくです。それにお湯に浸かるのは

狩りで獲物をしとめたときのご褒美として!!」

子供っぽく腕を振り上げる仕草につい笑いこぼれる。

「じゃあはやく浴びてこいよ。」

「はぁい」

さて、リオが行ったところで読書でもしますか。

と、本棚から分厚い本と文庫本、雑誌を引っこ抜く。

ハンターなら必ずといっていいほど購読する、「狩りに生きる」

や、「王立学術院所蔵生物博物誌」

などと書いてある頭が痛くなるほど分厚い本。数十分したあとリオが出てきたので俺は顔をあげた。

「にやつ!？」

自分のものとは思えない素っ頓狂な声があがる。彼女はバスタオルを体に巻いただけの格好でドアの前に立っていた。

上気した頬が無情にも色気を放つ。その頬には濡れた髪の毛がはりついて、破壊力を増す。

「おまつ、なんて格好してんだ」

「熱いので休憩です。」

絶句する。当然のことです、と言わんばかりに仁王立ちするリオ。

ああ、そうですね休憩デスカ。ヨークワカリマス…。わかるか!!

「…、シャワー浴びてくる…。」そうして俺は部屋をでて、バスルームに向かった。

「あつ。」

そして俺がいなくなるタイミングを見計らったかのようにタオルが地面へとはらりと落ちたのである。

第三話 姫の初陣（前書き）

いやゝゝ

投稿遅れてすみません！！

身内の不幸やテスト期間とやらが重なってまったく投稿できませんでした！！

そのかわりにかなり長くしました
え？首がもげるかと思っただって？

（ゝゝゝ）ユルシテチョ

てことでこれからも応援をお願いします（ゝゝゝ）ノン

第三話 姫の初陣

――朝――とはいっても陽の昇る前の暗闇である。

人の姿の見えない街中で一人の少年が声を張り上げていた。

「ハアツ！！ハアツ！！オラツ！！！」

太刀を模した木刀を縦横無尽に振り回し、確実に的となる木へと叩き込んでいく。

刹那 木刀は鈍い音をたて、真つ二つになってしまった。

「あっちゃあ…、またやってしまった…。」

これで何本目だろうか。いくら太刀の練習だからといってこれ以上壊せばさすがに製作者が激怒しまいかねない。ハクはため息をつく
と薪を積んである所へ放り投げた。

カランと軽い音を立てて木刀の残骸は地面に転がり落ちる。

「さて…、シャワー浴びて準備するかな…。」

ちょうど太陽が昇り始め、あたりを朱色に染め上げていた。

シャワーを浴びおえたハクは真つ先に食事を用意した。

昨夜と同じ自作携帯食料をつかったスープ、パン、卵を台所に出しておく。

彼女が起きれば用意すればいい。自分はそれまで防具や武器の調整と
道具袋ポーチにもっていくアイテムをいれていく。

彼女は初心者なのでいつもより回復薬を多めに持っていく。

念のために秘薬ももっていくとしよう。非常に効果だが有事は重宝する。

そして砥石。剣士の必需品である。使い捨てではあるが水で濡らし
数回擦るだけで

切れ味は回復し、刃先の少し欠けた剣もある程度は修復できるとい
う優れ物である。

そしてもしもの時のための閃光玉。これくらいいいだろう。あと

は彼女にまかせればいい。

「頼むぞ、桜花^{オウカ}。」と彼は立てかけてある太刀に声をかける。

桜花といっても彼が名前をつけたのではない。この太刀の製作者がそう呼んだ。

だが性能は鉄刀神楽とは変わりはない。柄の部分が通常と違い、桜色なのである。

何故名前をつけたのだろうと俺は幾度疑問に思ったことだろうか。思案顔で悩む俺に構いなく声をかける人物がいた。

「おはようございます…。うう…。」

「ああ、リオか…。おはよう。今日は午前中は村を回って、午後から狩りに出かけようと思うんだけどさ。それでいいかい？」

「ふあああ…。顔洗ってきましゅ…。」

昨日突然居候することになった彼女。遠慮というものがないような気がするが…。

ふらふらと覚束ないリビングから出てゆくりオ。

あの子はかなりの天然なのかもしれない。いまさらにそう思うハクである。

2人は用意していた朝食を食べ終え、武器や防具を装備していた。

「そついや狩りは初めて？」

「はい…。ここに来る時は他の二人がやつつけてくれましたので…。」

「ということはあるの二人は相当な実力者なのだろう。」

「……、……。よし、じゃあ君は俺の援護をしてくれ。俺の後方の敵、

および左右の敵の掃討はまかせるよ。正面の敵はこいつで十分だ。」
ガチャリと得物を握りしめる。

「でももし私がスケイスさんの背中を撃ってしまう危険性もあります…。」

「ハハハ、大丈夫。君を信じているから。もし君が俺を恨んでいて、

俺の背中を狙い続けるなら話は別だけどね？」

「なら大丈夫ですね！！」

「うーん、大丈夫かなあ……？」

わざと不安そうな顔をする。我ながらに性悪な奴だと思うよ。

「ええ！？ 私誤射しませんから大丈夫ですよ！！！」

涙目で訴えかけるリオ。やばい、不覚にもドキッとしてしまった。

「いこうか……」

「はいッ！！！」

道具袋の砥石やら回復薬やら弓用ビンやらを鳴らしながら俺達は出発した。

春空の元、2人の若者は日の下へと出でる。今日の空は2人を見守るような暖かさだった。

「相変わらず今日も人が多いな……」

村の中央市場にやってきた二人は道具店をでて次の場所へと向かうとしていた。

新鮮な生魚が氷結晶の中で冷やされた状態で競りにかけられている。もう片方は各種精肉、はたまたモンスターの生肉までを

同じく氷結晶で冷やして販売している精肉店。今日も活気は祭り状態だな……。

「はぐれたらドンドルマの自由市場みたいなことになりそうです……」

ドンドルマ

大陸一を誇るハンターの街である。様々な防衛設備を整え、古龍の撃退に

何度も成功している無敵の城塞都市である。

その名を聞いた瞬間にチクリと昔の記憶が塞がりかけていた傷口をこじ開ける気がした。だが、すぐさまその思いを振り払い笑顔で答える。

「ハハハ、あそこは本当すごいよね。昔組んだ仲間と市場に出かけ

た時

手を繋いでただけどはぐれちゃってさ。結局何も買えずじまいで。

「

その話にリオは上品に笑う。そして市場の出口付近で足をとめた。そこは金属と木造の混同で建てられた工場のような外見の家屋である。

大きな煙突からは黒煙が立ち上っている。

「ねーさぁーん、今いいかー？連れも来てるんだけどー」

カンカンと響いていた金属音がやみ、ガタガタと音を鳴らしながら扉が開いた。

「なんやー！？お、ハクやないかー！！ホンマ久しぶりやなあ！！どや？桜花の使い心地は！？」

この威勢のいい方言を使い、立て続けに話す女性はこの村一の鍛冶屋、フェシリー・ハレビーである。

「お、この子が連れかいな！！ごっついべっぴんさんやなあ！！そうかそうかハクがこないな女子を連れて歩くようになったんかいな！！ねーちゃん嬉しいで！！」

「このうるさい姉さんはフェシリー。この村一の鍛冶屋ね。」

「よろしく願います、リオ・ルクスライトです。」

「このバカよろしくなー、リオ！！世話焼けるバカやけど末長く付き添ったってえな！！」

「何の話をするんだ、姉さん…。」

その話で頬を赤らめ、「はい…。」と小さくつぶやくリオ。あれ？おかしな流れになってない？

「そいや、今から狩りかいな？」

ハクやリオの姿を見てフェシリーが訪ねた。

「今すぐにつてわけじゃないが。昼食を食べてからこの辺りの土地をまわりながらのランポスの間引きクエストに挑戦するつもりだよ。」

「やったら帰りは2日後くらいかいな。気をつけるんやで？最近ドスランポスが

頻繁に姿現しよるからな。もしかしたら複数いるかもって噂や。」
鍛冶屋で顔が広い彼女はギルドの情報まで知っていたりするからお
ろそかにはできない。

「またギルドの受付嬢にでも話を聞いたのか。また今度食事にも
誘うよ。」

「待つてるさかいはや帰ってくるんやでー！」ぶんぶん手を振りな
がら

「まっとするでえーっ！！！」とフェシリ　は俺たちの姿が見えなく
なるまで

叫び続けていた。

数分後二人はギルドの酒場にてランポスの間引きクエスト「肉食竜
を討伐せよ！」を受注するのであった。

「お、スケイスさん。お疲れ様です！今日はどこで狩るんスか？」
村の出口の門を通る時に門番の青年に声をかけられた。

「ん、間引きクエストだからなあ……。一応このあたり周辺のランポ
スを

時間ギリギリ狩ろうとは思ってますよ。それまで村の守りはまかせ
ました。」

「合点承知！！」ガッツポーズをして青年は声を張り上げた。

「うるせえ！集中できねえじゃねえかッ！！あ、なんだハクが来て
たのか。」

通りでコイツがはしゃぐわけだ。」

門の向こう側から声がしたので振り返ってみるとそこには大柄な男
がランスをもって立っていた。

「 Bans さんこんにちは。どうしたんです？今日も自作の川柳書いて
たんですか？」

Bans はガハハと笑い声をあげた。

「そうだ！！その通りだ！！ガッハッハッハ！！！！お前ちよつと聞

いてみるか？」

「いえ、今から狩りですのでまた後日お願いします。」

始めて村に来た時に川柳を聞かされたときは丸一日川柳について語っていたのだ。まさに地獄だった。

この人の川柳好きは病気である。

「その可愛い子は君のコレか？」小指を突き出し、笑顔で言うバンス。

「ハハ、違いますよ。養成ハンターとして大陸からきたハンターですよ。」

「リオ・ルクスライトです。よろしくお願いします。」

ぺこりと頭を下げるリオに向かってバンスは優しい声で言った。

「おうよ！俺はバンス・フィルガー。昔はハンターだったんだが今はこの村の門番だ。ハクに嫌なことされた時にや俺に言ってくれりゃあ成敗してやるからいつでもいいってこい！！」

「完全に俺がイジメてるのが前提ですよね、ソレ。」

「ガハハハ！まあいいってこい！！帰ってきたらまた飯おごってやるからよ！」

「ええ、楽しみにしてますよ。では、また後日。」

笑顔で対応するが豪快なバンスには正直たじたじである。

そして二人は林を抜け、ロクシェ村に隣接しているルヴァ森林へと到着した。

「今日はここで夜を明かすぞ。まずは拠点^{ベースキャンプ}に荷物を置いて、それからランポスを狩ろう。目標は今日一日で20頭だ。」

「20頭も狩って大丈夫なんですか！？」

「最近異常発生しているらしくてさ。バンスさんのおかげで村の被害はないんだけどもしかしたら付近にドスランポスがいるかもしれない。それに間引きしとかないと村にくる商隊が危険に晒される。」

「なるほどお。」感心したように頷くリオ。

「お前も少しは勉強しろよ？」

「そうですよね…。」シューンと落ち込むリオ。

「やばい、上目遣いでこつちをチラチラみるのは反則すぎるだろう!!」
「そう落ち込むなって。どうせこつちで君が一人前になったとしても
むこうに俺も付いていって調整しなきゃならないだろうしさ。」

途端にパアアツと顔を輝かせる。

「じゃあ、早く行きましょう!!」そして早く帰って遊びましょう
!!」

そう言い残し^{ベースキャン}拠点へと走っていくリオ。

まったく可愛い奴め。ってあれ?趣旨が違ってきてない?

俺もリオの後を追いかけて、ハンターとしての狩りが始まった。

「ギアアツ!!」悲鳴を上げ、血飛沫を上げながら地面に倒れたのは鳥竜種ランポスである。青い鱗をもち、鳥のような、トカゲのような外見からそう呼ばれている。

「後ろはまかせたぞ、リオ!!君も後ろには気をつけろ!!」

また一頭。太刀の突きによって絶命したランポスを切り捨てる。
残るは一頭…。

「ギアアツ!!」ギアギアアツ!!」突然遠吠えのような仕草をしだすランポス。

「援軍がくる!!」気をつけろ!!」

ランポスの個体自体は正直なところあまり強くはない。

だが、ランポスはこの統率力と数による集団戦法によって、次々と獲物を手に入れる。

しかも大抵の場所にはいるので初心者ハンターにとっては一番最初に戦う本格的なモンスターなのである。

「ギアアツ!!」ギアアツ!!」ギアギアアツ!!」

ランポスの援軍が到着した。通常にしては多すぎる。

「…、10体か。このあたりにかなり潜んでるみたいだな…。リオ

「！！後ろに気をつける！！俺は突貫する、援護まかせたッ！！」

「はい！！了解ですう！！」

「ギヤアアアッ！！！！」

リオが放った矢。強撃ビンに浸かり、威力を増した矢は初発は回避されるも、ランポスに

命中してゆく。だが致命傷にはならず起き上がりこちらへと向かってくる。

「ギヤアッ！！」4頭がジャンプし、こちらへと飛び込んでくる。

2頭はこちらへ走って向かってくる。時間差攻撃である。

「……」無言で桜花を横一直線に振るうと、空中のランポス達の首は吹き飛んだ。

悲鳴すら上げられず、四肢と頭を切断されたランポス達は血しぶきをあげながら地に墜ちる。

「ギヤッ……」仲間の死を目の当たりにしたランポス2頭の動きが

止まった。

すかさず太刀を突き、切り上げの攻撃で一頭を絶命させる。

「ギヤア！！」

後ろにまわりこんだ2頭のランポスは俺にかみつこうとしていた。

だが……

バシユッ！！

「ギヤッアアア……」後ろを振り返るとリオのハンターボウが構えられていた。

ランポスの亡骸の頭部には矢が一本ずつ……

「すごいです！！たった一人であんな戦い方をするなんて！！スケイスさんは

すごいですう！！」目を輝かせながらこちらへ走ってくるリオ。

「急いで解体するぞ。小型鳥竜種は特殊な溶解液を分泌してモタモタしていると解体できなくなるからね。」

太刀についた血を振り払い、鞘におさめた後腰から解体用のナイフ

を取り出した。

ランポスの背中からナイフを入れ、魚をおろすように肉を剥ぎ、牙、皮、爪、うろこ素材になる物だけを道具袋ポーチに修める。

「このクエストが終わればリオの防具はランポスシリーズにできるだろうね。鉱石もってる？」

「にや…、鉱石はここにくる間にお金に…。」

「じゃあ採掘もやるところか。あと数体でノルマだしね。」

「了解です！！」嬉しそうな顔をして隣を歩く彼女に対して、俺は魅力を感じずにはいらなかった。

「この洞窟の中が結構採掘できるポイント。」

地図を片手に説明する。

「真っ暗ですけど大丈夫なんですか…？」

「心配しなくても大丈夫。洞窟っていつでも中は数メートルしかない洞穴みたいな感じだから。」

「にやふう…、怖いところは苦手なんです…。」

「といっても鉱石採掘しない限りは防具をつくれないうし武器もつくれないんだけど？」

「そ…、それはこまりますッ！！」

「じゃあ、いくしかないよね？」

「はい…。」

普通は俺が洞窟内で採掘し、リオに渡せばいいのだがギルドの監視によってアイテムに振られたレベルによって取引できるアイテムが決まっている。なのでリオもついていくしかなかった。

「こういう壁の亀裂にピッケルを打ち込めば石ころがでてくる。

その中に鉱石とかが入ってるから、それを採集するんだよ。」

そういつつピッケルを亀裂に打ち込む。

カアンツと音を響かせ、石ころがいくつも落ちていった。

その作業を20回ほど続け、亀裂の下には石ころの山が積みあがっていた。

「さて、鉱石をさがさないかね…。」

「うう…、暗いですう…。」

「探し終えたらすぐ出ようね。だからそれまでの辛抱だ。」

「はい…。」

石ころを洞窟の奥へ投げ捨て、鉱石は道具袋ポーチにいれていく。

数分で作業を終えるとリオは放心状態だった。

「……。」

「しっかりしてくれ。もうでるんだから。」

ユサユサと揺らしてもリオからの返事はない。

「肩借りるぞー。」

肩をもち、立ち上がるがまったく力が入ってない。

「（これはまた…。）」

そのまま洞窟の外にでるが、リオは完全に人形のようにになっていた。

「おーい？リオちゃん？」

返事がない。ただの屍のようだ。

「仕方ない…、キャンプにもどるか…。」

リオをそのまま担いだ状態でゆったりとキャンプに戻っていった。

モンスターも空気を読んでいるのか出現もせず、無事拠点に

戻っていったことにはモンスターに対して感謝しようと思った。

途中で正気を戻したリオに盛大に殴られ、気絶した俺をリオが

キャンプまで運ぶという事件のおかげで俺の頬は赤く腫れてしまっ

たのだが…。

第四話 小狼の衝動（前書き）

テスト期間だというのに授業中ノートに小説を書いています（、
、）

先生に何度見つけたことか・・・OTZ

でもめげずに書き続けてます（、・・・、）

ではでは第四話！！ 小狼の衝動はじまります！！

第四話 小狼の衝動

「イテエッ……。」

「わっ、す、す、すみませんっ!!」

俺は腫れた頬にすり潰した薬草をリオに塗られながら、鉄刀神楽《桜花》の手入れをしていた。

太刀はデリケートな武器なので手入れは必須なのである。

「うう・・・、本当にごめんなさい・・・。」

シユンとなって謝るリオ。

「気にするなつて。でもまさか装甲のついてる手甲で裏拳をかまされるとは思ってなかったけど……。」

「あうう・・・。」

気を失ったりリオを肩に担いで拠点^{ベースキャンプ}にもどる道中、意識を取り戻したリオに

思いっきり殴られたのである。

「塗り終わりましたあ・・・。」

「よし、じゃあ残りのランポスを狩りに行くか。」

スタツと立ち上がり伸びをする。

「はいい・・・。」

「元気ないな。俺は気にしてないんだからいつまでも気に病んでも無駄だぞ?」

「わかりました。私もう気にやみません!」

「いい子だ。」

頭を撫でると嬉しそうにすり寄ってくるリオ。

まるでプーギーだなあ・・・、と思いつつランポスを探す俺達だった。

日が傾き始めていた。

空はもうあかね色である。ランポスはいつこうに見つからず、2人とも疲労しきっている。

「つかれましたぁ・・・。」

「だよなあ・・・。これだけ探しても見つからないのは珍しいよ。」
ガサツ・・・。

手をリオの口あたりにあげ、静止を促す。

鉄刀神楽、桜花を音もなく鞘から抜き放ち、構えた。

「ブフオオッ！！！！」

草木を掻きわけ現れたのは、イノシシのような外見のドスファンゴである。

ドス、とついているのでリーダー格であり、一般的にはブルファンゴの

強化版といった感じだ。ブルファンゴとの違いは毛皮の色くらいである。

ランポスに縄張りを追われたのだろうか。体には無数の傷があり、痛々しい。

「リオ、離れろ！君の防具だと即死するぞ！」

「死にたくないですう！！スケイスさん前衛はまかせました！！」
地面を擦り、今にも突進しようとするドスファンゴ。

リオは一目散に逃げ出したッ！！

「ブツフオオオオオオオ！！！！！！」

痺れを切らしたかのようにドスファンゴは突撃してきた・・・！

「真っ直ぐにしか走れない敵なんて止まってるだ！！」

俺もドスファンゴにむかって走り出す。

「ブフオ！！？」意表を突かれたのかドスファンゴの一瞬動きが止まる。

その隙に突進の範囲から転んで回避する。あと牙は文字通り凶器だ。

「ハアッ！！」

横を通り過ぎるドスファンゴに太刀を振り下ろした。

「ブフオア！！」ドスファンゴの動きが止まり、血が吹きだすが、

ランポスと違い、肉質が硬い・・・。

「ハアッ！！ハアアッ！！テヤアッ！！！」

突き、切り上げ、切り下がりどスファンゴの体に傷を負わせていく。

「ブウウフオオオ・・・！！！」

ドスファンゴがこちらを向いた・・・！！

バシユバシユ！！バシユバシユバシユ！！！！

風切音が鳴り響き、ドスファンゴが苦しそうにもがく。

「スケイスさんはやらせません！」

木の上に登り、ドスファンゴに向かって矢を放つリオ。そのバランス感覚には舌を巻かずにはいられない。

「助かった！！ありがとう！！！」

前後からの挟撃が始まった。

俺はドスファンゴの正面から突き、切り上げ、振り下ろし、なぎ払いと

攻撃を加えていく。血しぶきなど構わずに切り続ける。

後ろからはドスファンゴの突撃を防ぐためにリオがドスファンゴの足へと強撃ビンに浸した矢を撃ちこむ。

そして猛攻にさらされたドスファンゴは・・・

「ブヒイイ・・・」

ドスツと音を鳴らし、ドスファンゴは地に倒れた。

「やりました！！！」

「ああ、報酬に上乘せされるな。こりゃひと儲けできそうだな。」

二人はドスファンゴの毛皮を剥ぎ、道具袋におさめた。

「少しもつたいないが牙を持って帰るには少し荷物が多い。諦めよう。」

「・・・はい。」

残念そうにドスファンゴをみるリオ。

「もう拠点にもどろつか。」そう言おうとした時だった。

「ギヤアアッ！！！！ギヤッギヤッギヤアアアッ！！！！！」

その鳴き声に反応して、太刀を鞘から抜き放つ。

「ランポスカ・・・いや・・・にしては数が多い・・・。リオ！！気をつけるんだ！！ドスランポスがいるぞ！！」

「にや！！？」慌ててハンターボウ？を構え、矢を握りしめるリオ。

「麻痺ビン持つてきてるか！？」

「はい！！撃ちますか！？」

「ああ！！麻痺ビンで弾幕を張ってくれ！！俺は抜けた敵を倒す！」すると木々が繁茂している方向からランポスが次々と現れた。数を数えるそばから増えていく。

その数はあつという間に30をこえていた。明らかに多すぎる。

バシユバシユバシユバシユ！！バシユバシユバシユ！！

「ギヤアアツ！！？」リオの放った麻痺矢により、体に穴を穿たれながらも、動きを止めるランポス達。

「ギヤアツ！！」矢を巧みによけながら三体のランポスが突っ込んでくる。

「ハッ！！」突きで左の一頭を、なぎ払いで右の一頭を絶命させる。動きを止めた最後の一頭に

縦切りをお見舞いし、吹き飛ばす。

「ギヤアアアアツ！！！！」

「ギヤアツ！！」

ひととき大きな声がする。すると森の奥から赤いトサカをもった一回り大きいランポスが現れた。ランポスの群れを統べるドスランポスである。

「リオ！！麻痺矢をドスランポスに撃ち続ける！！」

「了解ですッ！！」

バシユ！！

放たれた矢は孤を描き、ドスランポスの頭へと飛翔する。

そしてドスランポスを中央に集まっていたランポス達に襲いかかった。

「ギヤアアツ！！！！」

ランポス達がひるんだ・・！！

俺は桜花を構え、突撃した。

道を塞ぐランポスを斬り捨て、歩みを止めずにドスランポスへと突っ込む。

そして、突きをドスランポスの喉元に・・・。

「ギアアアッ！！！」突如血しぶきによって視界が赤く染まり、俺は後退する。

ドスランポスに突きが届く前にランポスが盾として立ち塞がったらしい。

「キャッ！！？」

緋色の視界の中で捉えたのはランポスの群れに包囲されたリオの姿だった。

衝動的に地面を蹴り、リオに噛み付こうとしているランポスにとび蹴りをかませる。

昔の記憶通りの動きそのままランポス数匹に蹴り技をかませる「ギアアアッ！！！」

いつの間に接近したのかドスランポスの長く尖った爪がリオに襲いかかる。

まずい、間合いが取れない……！ 太刀で爪を弾く考えを捨て去り、身を呈して守る選択に入った。

スローモーションで爪が振り下ろされていく……。左腕を振り上げ爪の攻撃を受けた。

バスッ！！と耳を塞ぎなくなる肉の断裂音。ドスランポスの爪は鉄鉱石とマカライト鉱石の装甲の

隙間の革を斬り裂き、俺の腕を骨が見えるまでに切り裂いていた。

ああ……、これじゃ太刀はもう振るえないな。冷静な考えが頭をよぎる。

そうした瞬間に体中に衝撃を受けた。ランポス達が四方八方から攻撃をしているのだらう……。

体中を斬り裂かれ、血飛沫が上がり意識が飛びそうになる。がその

時間はあつという間に終わった。

首筋をピリピリと焼く感じ。間違いない、殺気だ。だが、誰が？その答えはすぐにわかった。

「ハク様を傷つけるな！！このトカゲエツ！！！」

ドンドルマにいた歌姫に似ている、少し幼げのあるリオの声。その声が殺気を纏い、空間を揺らしていた。直後風切音が無数に鳴り響き、俺を踏みつけていたランポスの重みが消える。

「そこから離れなさい！！トカゲツ！！！」

バシユバシユバシユバシユバシユバシユ！！！！

「ギヤアアツ！！ギヤギヤアツツ！！！！」

大きな悲鳴が上がったと思ったら、数秒後にドスランポス達は退いていく。

すぐさまリオが駆け付ける。

「大丈夫ですか！？ハク様！！！」

リオが優しい手つきで俺を抱き上げる・・・。

「ハク様！！」涙を流しながら俺の名前を連呼される。

「うえ・・・みつともないとこ見せちゃったなあ・・・」

「ハク様ああ！！死なないでください！！！！」

ぎゅーっと抱きつくリオ。おい、それ以上すると別の意味で死にそうだ！！

「死なないから・・・！とりあえず離してくれえ！！苦しい！！！！」

「あ、ごめんなさい！！！」

ゆっくりと地におろされる。

ふにつ・・・

なんだこの柔らかい感触は？

ふと目線を上げるとそこには逆さのリオの顔があった。ということ・・・

「膝枕・・・！？」

「動いちゃだめです・・・。今傷口に回復薬と薬草を・・・。」
血止めの回復薬と傷なおしの薬草を切り裂かれた部分へと

丁寧に塗られていく。

ポタツと頬に濡れた感触があった。

「私が・・ツ、弱いから・・っ！！ハク様に傷を負わせてしまったんです！！！」

「本当にごめんなさい！！！」

涙を流しながら謝るリオ。その姿は痛々しくて・・、儚くて・・。心を締め付ける感じだった。

そう、締め付ける強さは違っても昔仲間を失った時のような感じの……。

「でも俺はちゃんと生きてる。君がランポス達を追い払ってくれたおかげで。だから泣くなって。」

「でも・・ツ！！ハク様に消えないかもしれない傷を・・！！！」

「そのハク様つてのやめないか・・？すんごい恥ずかしいし、さっきまでスケイスって呼んでた

じゃないか・・。それにか弱い姫を凶暴なモンスターから助けた傷だよ。誇りをもって刻めるって。」

目をつむって思い出す。リオレウスの猛攻によって傷だらけになった時のことを・・。

「・・・・・。」

「だから泣いちゃダメ。せっかく笑顔が似合うんだから笑ってくれ。」

手を伸ばして頬をぐにーっと引っ張る。

「いたいれふう！！！」

「ハハハ、その顔その顔。」手を離すと痛そうに頬をさするリオ。その顔にはいつもの笑顔が戻っていて・・。俺はときめいてしまった。

心臓が理性に反し、早鐘を打つ。これは非常によろしくない！！

「あつ、まだ動いちゃだめですよー！！！」

起き上がるうとする肩を押さえつけられる。

「道具袋アイテムポーチに古の秘薬がある。半分は傷口に塗ってくれ。もう半分は

飲むから。」

すぐさま俺のポーチから古の秘薬を取り出し、袋から半分取り出したのを俺の口の前に差し出してくる。

「あーんです。」

頬を赤らめながら指に取った秘薬を俺の口へと運ぶ。

「はむつ。」ハチミツで固めた団子のような食感の秘薬が口に入ると同時にリオの指も……。

「ふえああああ！！！」指をとつさに俺の口から引き抜く。指についた秘薬は綺麗に取れていた。

「ふへつ、だいぶ楽になつてきたなあ・・・。」ふ抜けた声を出しながらため息をつく。

そしてリオに背を向け薬を塗ってもらった。

ハクはこの時知らなかった。先ほどまでハクの口の中に入っていた人差し指をリオが愛おしそうに

握りしめていたことを。ハクは俗に言う鈍感男であるのだ。

「はやく拠点にもどって夕飯食べよう。お腹ペコペコだ。」

秘薬を傷口に塗り終えると、すぐさま瘡蓋^{かさぶた}になり、傷の回復が始まる。二、三日すれば

傷跡も残らず完治するだろう。

「はい！！料理は私に任せてください！！！」

「お、そう？ならまかせちゃう。」

「了解です！！」ガッツポーズを決めて笑顔を見せるリオ。

やっぱりこの子かわいいなあ・・・

イカンイカン！！これはよろしくない！！非常によろしくない！！

ベースキャン

拠点に戻り、リオに料理をまかせたはいいが、生肉を焼かせると残ったのは

10分の1に縮小した炭とスープは白濁色のはずが、紫色だったり
と見た目は生物兵器と化した。

涙目になるリオを慰めるため、俺は命をかけて味見をしたが口に含

んだ瞬間に
意識が飛び、俺は本日2度目の気絶を味わったのである。

第五話 小狼の記憶（前書き）

コンニチハ！

ユニークアクセスが500人を超えつつある破駆です（´・・・´）
まさか友達に見せようと書き始めたものがみなさんの目によって評価されるなんて

夢みたいで夢みたいで鼻血ものです（´・・・´）

みなさんよければ評価＋感想をぜひくださいな！（´・・・´）
アツ

私の顔が緩みっぱなしなのは仕様です（´・・・´）（´・・・´）

第五話 小狼の記憶

夢を見ていた。いや、正確には夢ではないのかもしれない。

夢、という希望あふれる形ではなく、記憶という琥珀色の絶望しか残らない、

冷たくて暗い世界なのだから・・・。

10年前シュレイド王国王都ヴェルド。

大陸の西端に位置し、大陸のほぼ全てを掌握した巨国が存在していた。

当時のシュレイド王国国王と大臣たちはハンターズギルドに対して友好的な立場で接していた。

だが、その巨国さえも黒竜と呼ばれる古龍種の襲来によって壊滅の危機に瀕していた。

当時のシュレイド王国とハンターズギルドはお互いの危機に全力で協力する条約を結んでいた。

大国シュレイドは己の威信と誇りをかけて、ハンターズギルドはハンターの意地を。

ハンターズギルドは大陸全土に緊急招集を発令。

英雄と謳われた者、殺戮者の肩書をもち恐れられる者。

様々な英雄クラスのハンターがシュレイド王国に派遣された。

ハク・スケイスの両親もその一員だった。

当時のシュレイド国王に認められた数少ないハンターとして王都を守るハンターだったのだ。

かつてのココット村での古龍撃退戦のようなジンクスを防ぐため、

ギルドは4人編成のパーティーを

複数編成。黒竜を完全なる態勢で迎え撃った。城の砦には大砲を始め、

対古龍用迎撃砲台バリスタ、同じく古龍に対する必殺兵器撃竜槍な

ど様々な防衛システムを

張り巡らせた。

だが、人間は古龍に大敗した。

英雄と称されるハンター達も古龍の前ではただの小さな灯でしかなかった。

結果、シュレイド城は半壊、大国シュレイドも2つに分裂した。当時6歳だった俺の元に届いたのは、血塗れ黒くなったレウスヘルムと

母の左腕とレイヤガード。それと大きな亀裂の入った父の愛剣炎剣リオレウス・・・。

「とおさんはどこ！？かあさんは！？どうしてかえってこないの！？」

沈痛な顔で遺品を俺に渡したギルド嬢に何度もそう聞いたが

「戦死なされました・・・。」としか答えなかった。

わけがわからず何度も「戦死ってどういうこと！？」と聞いた。

結局家の前で雨の日も、太陽が照りつける日も、

俺は両親を待ち続けた。1か月がすぎ、季節が変わっても両親は帰って

こなかった。そして、俺自身も限界を迎えようとしていた・・・。

夜は毎日両親がモンスターに殺される悪夢を見る。

昼は外で帰ってこぬ両親を待ち続ける・・・。

僕・・・とおさん達に捨てられたのかな・・・？

「・・・さ・・・様・・・！！・・・ハク様ッ！！！」

何度も耳元で名前を呼ばれ、俺は目を覚ます。

全身汗ビツシヨリで呼吸も荒い。

「大丈夫ですか・・・？かなりうなされてました・・・。」

リオの顔が反対になっていることからまた膝枕状態なのだろう・・・。

「ハア・・・ハア・・・、もう大丈夫だ・・・、ッ！！！」

起き上がろうとした瞬間に肩を押さえられる。同時に頭痛もしたのでそのまま甘えることにした。

「だめです！！・・・私の料理を食べた途端に気絶するなんてそんなにおいしかったですかあ？」

「逆だバカ・・・死を味わうようなものだったよ・・・」

炭化した肉と白濁色になるはずだった紫色のシチュー。

涙を浮かべるリオに対して、死を覚悟して俺は味見したのだ。

そこから記憶がない。正確には過去の記憶を夢として見ていたのだ・・・。

「うう・・・ごめんなさいです・・・」

「大丈夫、ちゃんと努力した味だったから謝る必要なんてないんだ。な？」

頭を撫でると「んう・・・」と気持ちよさそうな声を出すリオ。

「さて、気を取り直して今度は俺が作るよ。」

「私もお手伝いしたいです！！」

おい、気分変わるの早すぎないか？

「じゃあ食後の食器洗い、まかせるよ。」

「了解いたしましたです！」

てきぱきと具材を切り、下ごしらえをする。

そして生物兵器の入った鍋を見下ろす・・・。

「（この料理・・・飛竜に食わせても効果あるんじゃないだろうか・・・）」

ベースキャンブ

拠点からすこし離れた滝の流れ落ちる川で鍋と食器を洗い終わった後、拠点にもどり、具材を入れ火にかけた。グツグツと煮込まれて具材が柔らかくなった所でミルクを入れる。そして火力を弱くして10分放置。

その間に別の肉焼きセットに骨付きの生肉をセット。

上から塩胡椒をかけ、下味をつけたら火薬草を乾燥させた乾燥燃料をセットし、

火打ち石で火花を起こし火をつけたら肉を回す。

肉焼きの歌なんて鼻歌を口ずさむと肉が焼ける頃合いになる歌も存在するが多くのハンターは恥ずかしいという理由で使用しない。

俺は自分の目と鼻と本能で肉の一番うまい頃合いを見計らって火からあげる。

「上手にやけましたっ!!」声を発した覚えはないがお決まりの文句が聞こえ、振り返ると拍手しながら笑顔を見せるリオがいた。

「よし、少し遅いけど夕食にするか。」

「はいです!!」

一口一口おいしい!!と感想を述べるリオ。

整った顔立ちで笑顔を向けられていい気分にならない奴は相当ねじれているだろう。

ふと先ほどみた夢を思い出す。

俺はあの忌まわしい記憶にまた、囚われようとしている・・・。

あんなこと二度とあつてはならないんだ。

無数の星の焰がまたたく夜空を見上げ、俺はそう心の中でつぶやく。そんな俺の様子を心配したのかリオが顔を近づける。

「どうかされました?ハク様。」

止めないと顔がぶつかるまで近づきそうなりオの頬を両手でおさえ、なんでもないと答える。

「では私は食器洗いをしますので、ハク様はお休みになられてください。」

「ああ。了解」

食器をもって滝へとさるリオを見送りながら俺は心の中で誓った。
もう黒竜の因果には囚われないと・・・。

第六話 妖精の水浴び（前書き）

テスト一日目しゅうりょーっ!!（´・・・´）
そしてテスト中に練りに練った小説の投稿でーっす!!
え？テストどうだったかって？

……。

突っ込むなよ!?（´・・・´）

第六話 妖精の水浴び

澄んだ夜空には星が輝き、またひとつ流星が己が身を焼き尽くしながら空を流れてゆく。

上空の空気の流れによって星の光は遮られ、星の輝きは瞬くように揺れる。

「ハア……。」

俺は今日何度目かわからないため息を大きく吐く。

そして夜空の中から北極星を見つけ、月の傾きからリオが皿洗いに行ってから相当な時間が経っていることに気づく。

まさかとは思うが拠点近くベースキャンプの滝でモンスターに襲われたか？

ふとその考えを導き出す。拠点だからといって確実に安全であるわけではない。

ランポスなどの危険なモンスターが入りにくそうな洞窟、上空からは山の陰で様子が分からない崖……。狩場では比較的安全な場所に拠点は設けられている。

といっても空から飛竜のプレスによって焼き尽くされた事例、轟竜と呼ばれる砂漠に生息し、

雪山にも出没するティガレックスの体当たりによって拠点ごと消えた事例も少なからず存在する。

「……。」やはり心配になってきた。

また少し月は傾いている。俺は本当に何度目かわからないため息を吐きながら滝川へとむかった。

滝川へと続く道にはモンスターの通った足跡は見つからない。

人の通った足跡が往復した俺のとリオと思しき物。腐葉土の堆積した地面に足を取られながら

滝川へと進む。

滝川の入り口にある木々のアーチを潜り抜けた

そこには妖精がいた。月明かりを受け、水浴びを楽しむその姿は芸術という言葉が似合うだろう。

「……。」口に出すことばが見当たらない。

俺の脚元にはリオの防具チェーンシリーズがひとつ残らず脱いであり、下着となるインナーさえも器用に折りたたまれている。

目の前の妖精は生まれたままの姿なのだ。

あいた口が塞がらないというのはこのようなことを意味指すのだろう。

「く」鼻歌を口ずさみながら水浴びを続けるリオ。

透明感のある歌声、すらりと伸びた四肢。それを彩るのは白い肌と金色の艶やかな長い髪。

それを翻しながら凜と踊り、水飛沫は妖精のようにワルツを踏む。

そしてゆつくりとこちらを向いた。

「キヤアアアアア！！？ハクシヤマアアアアア！！？？」

ざっぷうん、と水しぶきを上げリオがしゃがみ込む。

「わっ、わっ悪い！！あんまりにも遅いからモンスターに襲われたのかと

思っ……て！！わざとじゃないんだ！！わざとじゃー！！」

とお決まりの疑われるセリフを吐き、木の陰へと隠れる。

「そ……、そうでしたか……。はうう……。……。」

パシヤツと水音がし、数分後にカチャカチャと音が鳴る。

そしてさらに数分後、顔を真っ赤にしながらちゃんと防具を着てリオが現れた。

「……。ごめん……。」顔が熱い。

「……いえ、私こそ事前にお伝えするべきでした……。」

しばし2人に気まずい空気が流れる。が、その空気を飛ばそうと葛藤していた俺よりもリオが空気をふつとばす一言を発言する。

「あの……、どうでしたか……？」

顔を真っ赤にして、指を腕の前でモジモジさせ、上目遣い。

その威力はガンランスの竜撃砲にも劣らない…。

「はい？」だが俺は意味がわからず聞き返す。

「お…ッ、女の子に恥ずかしいことを何度も言わせないでくださいッ！！」

「……。」やっとその意味を理解する…。というかこのままじゃ色々

誤解されたままじゃないかッ！？

「…そんなに見たかったのでしたら正直に言ってくればよかったです。」

うつむいてボソツと呟くりオ。

「そんなセリフ他の奴に言うと襲われるぞ！？」

心配になり、そのセリフを言うと

「ハク様なら私は」

「そ…ッ、そんなことはともかく！！明日はこの森一体を搜索してドスランポスの狩猟に切り替えるからな！？このクエストの根幹を倒せば

依頼成立なのだしッ！！」

「話そらさないでください…。…わかりました、ではお先に失礼します。」

食器をもって走り去っていくリオ。

あれ？俺なんか悪いことしたかな？そんな罪悪感が俺の心を支配する。

「にやああああ！！！」髪の毛をワシャワシャとする。

周りから、特に女性から羨ましいといわれる銀髪。

だがこの色は原色ではない。もとの髪色は完全に黒髪である。

これも黒竜の呪いなのだろうか。

ふと、んなワケあるかと思ひ直す。そして頭を冷やすため滝に打たれた。

夏直前とはいえ滝川の水は刺すように冷たい。

10分ほど打たれて俺は拠点へと戻った。
ベースキャンプ

テントの前で行儀よく体育座りをしているリオ。
その頬が少し膨らんで見えるのは俺の見間違いですかそうですか。
「もう休んだほうがいいぞー。明日は決戦だからなー。」

気まずくて棒読みになってしまった。読んではいないが。
リオはゆっくりと立ち上がってこちらを向いた。

「ハク様はあんなことをしておいてアフターケアしないんですか!？」
女の子は事後処理も大切なんですよ!？」
アレ?意味チガワナイ?

「……(´・`・´)」返す言葉がありません。
「もう知りませんッ!」そういつてテントの中へと入って行ってしまった。

一人テントの前で見張りをする。
怒らせちゃったなあ…、と後悔の念が浮かぶ。だがその考えを振り払った。

明日は本格的な戦闘を行うのだ。無駄な考えは振り払わなければ。
リオが見ていてくれた火に薪をくべ、桜花をみる。
鉄刀神楽、本来の名だが製作者の鍛冶屋が名前をつけた。
実際普通の鉄刀とは違い、桜花の名前通りに柄の部分は桃色で、
鞘は対照的に新緑のような黄緑色である。

状態も非常によく、芸術品といっても差し支えない。
刃を鞘におさめ、数多の飛竜刀へと思いを馳せる。

雄火竜リオレウスと雌飛竜リオレイヤの素材をつかった刀である。
火竜の素材を用いた火耐性、発火性の火竜の骨髓を刀身に使用し、
鞘から抜き放てば刀身が焰に包まれる刀。
肉に触れると炭化するほど灼きつくす刀。

そして敵の肉を斬ると血を一瞬で蒸発させ、爆発させる刀。
もちろん敵の肉を腐る隙もないほど灼き上げる能力も付加されている。

火竜として代表的な武器であり、多くの太刀使いにとっての憧れの武器でもある。

俺は自分を認めれるまでその刀達は持たないと誓っていた。

火竜を討伐した経験はある。だが、それは遠い昔のことだ。

宝の持ち腐れというのだろうか？未だにあの頃に入手した火竜の素材が自宅のアイテムボックスに

眠っている。

まあ使う気になれないというのは理解していただきたい。

そんな刀達に思い馳せながら俺はうつらうつら舟を漕ぎ始めていた。俺のそんな思いに呼応してか、夜空には夏の代表的な星座である飛竜種の星座がいくつも瞬いていた。

第六話 妖精の水浴び（後書き）

どうも！！

今回は少し路線をはずしてみました（．．．）

やっぱり鉄板シーンとは言っても、似せずに書こうとすると難しかったりしますね

今回のメインは飛竜刀の紹介を。

火竜の骨髄には発火作用があり、飛竜刀や

他の様々な武器に火属性を付加するため使用されます。

火竜の体液は防具を繋ぎ合せたり、武器の接着や

発火効果の増大にあります。

そして骨髄の発火性能！！骨髄は空気に触れるだけで燃え盛るほどの発火作用があり、

火竜の耐火性能の高い素材と合わせ、刀身に使われる金属と混ぜ、合金化することで敵を焼き尽くす刀になるわけですがどうやらシリーズや地方、種類によって

発火条件が違ふようです。

2Gでは斬れば相手を焼き、3triでは相手の血を沸騰させ、爆発させる…。

そして刀身が焰に包まれるのは練気オーラによるものと推測しております。

火竜の延髄（延髄って脳の一部なんです…移植できないかなあ（蹴）

は骨髄を上回る発火性能によって骨髄よりも剥ぎ取りが難しいんですね…

そんな飛竜刀…。それは浪漫溢れる武器なのです！！（蹴

え？ガンランス？あれは漢の武器っしょ！！）

第七話 蒼き密林の狩人（前書き）

第七話 蒼き密林の狩人

快晴　その一言にすら余るほど綺麗な空だった。

遠くの空の低層には白い雲がこの付近一帯を覆うリングのように流れている。

そして高層の空にはどこまでも蒼い空が続く。

神秘的な風景を醸し出す世界は、何を思い突き進んでいくのだろう。

「……。」

昨日のことを思い出すとまたほっぺたが熱くなってしまいます…。

まさかあそこでハク様に裸を見られるなんて……ッ!!!

「~~~~ッ!!!」

リオは一人テントの中で悶絶していた。が、ほんの少しだが恍惚の笑みを浮かべているのを

本人が気付いていない。

「はうう…。恥ずかしい…。ですけどなんだか嬉しくも…。って私は何を!？」

そう一人芝居を続けながらテントを出る。

「わあああッ!!!」

絵にしたくなるほどどこまでも綺麗な空だった。空から巨大な物体が落下した後のような、

青空の果てまで雲に穴が空いたような、本当に綺麗な空だった。

「ハク様にも見せて差し上げなければ!!!」

決意をして、周りを見渡すと

そこには起きている時の隙のない気の張った顔ではなく、

ナイーブで、年齢以上に無垢な幼さの醸し出された少年の顔だった。太刀を自分の体に立てかけ、岩壁にもたれかけながらすすうと寝

息を立てている。

「…ッ!」

母性本能を刺激するその姿はリオに絶大な破壊力をもたらした。

「（あ…あんな寝顔をするなんて反則じゃないですかッ!）」

そつと近づいていくとますます起きている時とのギャップに胸を突かれる。

規則正しい寝息を立て、刀を大切に握りしめている姿は正に戦士の休息である。

「ちよつとくらいは…、いいですよね…?」

ゆつくりと膝をつき、顔を近づけていく…

「んう…?」

「ひゃっ!?!…寝言ですか…、心臓に悪いです…。」

再び顔を近づけ…、

「ふあああああああああゝ…。」

盛大にあくびをするハク。

「にやつ!?!にやあああああああああッ!?!…!」

驚いてしまった私は思わずハク様のお腹へと正拳突きをくらわせてしまうのでした。

「……、朝っぱらから殴られるようなことは昨日以外していないと思うんだが…。」

痛む腹を擦りながら俺は呻く。

「ハク様は意地悪ですッ!」

斜め上を向き、プンプンとするリオ。

「とうかなんであんなに顔を近づけ ツ!?!」

「……ッ。」

リオから殺気が溢れだす。俺はもう黙っていよう。

「…じゃあドスランプスを目標に掃討戦を始めようか。」
アイテムボーチ ヘースキャンフ
道具袋から地図を取り出し拠点を目指す。

「現在地はルヴァ森林の南西。昨日ドスランプスに遭遇したのは9

番。

けどここは木々のせいで通路みたいになってるし、見通しも悪い。決戦場にするならここだな。」

そして一番広い7番エリアを指さす。

ルヴァ森林のほぼ中央に位置する円形のホールのようになっているエリア7は

飛竜の巣にも使われる。エリアを覆う岩壁のすぐ下は崖であり、落ちれば即死が待っている。

が、その地形によって待ち伏せ以外の奇襲に会うことがない。

決闘するために生まれたような地形である。

「ここにはいつも数体のランポスがいる。わざと援軍を呼ばせてドスランポスを誘き出そう。」

「はいッ!!」

さつと立ち上がり、昨日焼いておいたこんがり肉をリオに渡す。

「冷めてて悪いけど今はこれで勘弁しておいてくれ。食べた後の骨はエリア7の入り口に捨てといてくれ。ランポスを誘き出せる。」

「ふあい!!このままでも充分いけますよ!!」

「そっか、さつさと終わらせて何か食べに行こうか。」

そして俺達は前へと進み始めた。

「ギヤアギヤア!!!!」

青い鱗の鳥竜が叫ぶ。

「これでドスランポスが来てくれるかな?まあ来なくても来るまで俺は待ち続けるんだけども。」

先ほどから侵入者を発見したランポスは鳴き声を上げ、仲間を呼び続けている。

「にしても、耳障りな鳴き声ですよね…。背筋がゾッとします…。」

「ああ、俺も嫌いだよ。早く来てくれないかな。」

「ギイヤアアアア!!!!」

ひと際大きな鳴き声がしたので振り返ってみるとランポスをおびた
だしいほど従えたドスランポスが

エリア7の入り口に立っていた。

「やっときたか、待ちくたびれたよ。昨日の傷の借りを返させても
らおうか!!」

ダンツと地面が吹き飛ぶ力で大地を蹴り、一気に突っ込む。

「援護しますッ!!」

風切音と共に矢がランポス達を襲う。ざっと確認したところランポ
スの数は30か。

異常発生という言葉通りいつもの数倍だ。まあ間引きも兼ねて掃討する
だけだが。

「ハアッ!!」

抜き放つ勢いで邪魔をするランポス2体の首を斬りおとす。

「邪魔をッ!!するなあッ!!」走る勢いを一切止めず、走りな
がら斬り払いによって道を穿つ。

「ギヤアアッ!?!」

「ギイエエアアア!!!!」

断末魔の叫びをあげて、次々ランポス達が絶命していく。

「ギヤアッ!」

ドスランポスの指令を受けて、動揺していたランポス達の統制が復
活する。

そして一気に俺へ向かって突撃してくる。

「どけえッ!!道を開けるオッ!!」斬り払いによって空中から襲
撃してくるランポス4体を

吹き飛ばす。仲間の亡骸にぶつかり数体のランポスが動きを止める。

「ハアッ!!テヤアッ!!」突き、切り上げ、斬り払い。

道をこじ開け、ドスランポスへと肉薄する。

ここまでの戦闘によって練気が溜まり、刃を包む。

斬味の上がった刃を構え、その勢いのまま突く。

「ギヤアアアアアアアアア!!!!」

悲鳴に似た叫び声を上げ、ドスランポスが飛び退く。久々に感じた思考の加速感。脳から肉体へ命令を下す電気信号が一気にスパークしていく。

ドスランポスの飛び退く軌道の先にリオが矢を放つ。

強撃ビンに浸され、威力を増した矢がドスランポスの肉を裂きながら突き進む。

後ろから攻撃を加えようとしたランポス達の動きが後ろを振り向かなくてもわかる。

前転し、俺がいた場所にランポス達が飛びかかっていた。振り向き、斬り払いによって

攻撃を加えようとしていたランポスを絶命させる。

再び振り返り、ドスランポスへ接近し太刀の力を放った。

気刃斬り

太刀の練気を一気に開放し、太刀の威力を飛躍的に上げる技であるが、発動には一定の修練を必要とし、また動きにムラがあれば練気を思うように扱えない。

毎朝木刀を振りかぶっていた動き。

右上から斜めに斬り下ろす。振り下ろされた刀を振り上げ、今度は左上から斜めに斬り下ろす。

血飛沫が上がり、視界が染まるが気にしない。

ただ目の前の敵を葬るだけだッ！！

練気を開放していると戦闘衝動が湧き上がる。

刃の向きを逆さにし、今度は元来た道を刃で駆けあがる。そして一気に振り上げ

振り下ろした。血飛沫を上げ、ドスランポスが吹き飛ばされる。

剣舞によって体中に深い傷を負わされて、もう限界なのだろう。

エリア7の入り口へと向かって逃走を始めた。
が、もう遅い。入り口にて支援に徹していたリオが閃光玉をもち、
立っていた。

円筒型の爆弾のピンを抜き、上へと投げる。

そして、空中にて爆発した。爆発とともに目を焼く光が放たれる。

「ギヤアアアア！？」

ドスランポスと、共に逃走しようとして試みていたランポス達は視界を
失い、その場でもがく。

その隙を見逃さず、俺は走り抜けた。

無論太刀を振る手を休めはしない。そして

ドスランポスの首へと突きを入れた。

「ギヤアアアアアッ……」

俺の顔を真つ赤に染めながら、ドスランポスは息絶えた。
残った十数頭のランポス達は悲鳴を上げながら逃走する。

「やりましたね！！ハク様あ！！」

リオが手を振りながら駆けよってくる。

電気信号が再びスパークして、思考の加速が終わる。

「ああ…、終わったな。早く剥ぎ取って帰ろうか…。」

「はいッ！！」

そうして俺達の初めてのコンビとしての狩りが幕を降ろしたのだ。

第八話 勝利の美酒？いいえオレンジジュースです（前書き）

ほえ？タイトルが今までと違っって？

そうなんですテストが終わって形骸化し、型どおりになっていたタイトルを

一新しようと思ったんです！！決してネタ切れなんかじゃないんですからね！！

第八話 勝利の美酒？いいえオレンジジュースです

疲労困憊した四肢に鞭を打って、歩き出す。

「にしても疲れましたねえ…。」そう言いつつくあゝと欠伸をするリオ。

うん、やっぱり可愛いわこの娘。

「だなあ…。早く帰って美味しい食事でも取ろう…。」

森から村までは徒歩で2時間ほどの距離だ。

ロクシエ村を覆う黒い絶壁はここからでもはっきりと視認できる。というか馬鹿でかい。

絶壁の切れ目にはハンターを引退したランス使いのバンスさんを含め、

数十人規模の門番がモンスターへの侵入や、通行人のチェックを行っている。

だが飛竜や古龍に襲われればひとたまりもないだろう。といっても多くが元ハンターである門番達。

昔に使っていた愛剣やボウガンを引っ提げ、市民の避難誘導やモンスターへの相手はお手の物である。

例外的に海からの襲撃には無力だろうな…。

「何考えているんですか？」

自分より頭一つ小さいリオがひょっこりと目の前に顔を突き出す。と同時に理性と腰を崩壊させる女性特有の甘いにおいが広がった。いかん、これは由々しき事態だ！！！！

「い、いや。帰ったら酒場で食事にしようかなあ…って。なんだかんだいってあの受付嬢の料理

おいしいしな。」

「ほええ、けどハク様の料理も負けてませんよ？あそこまでおいしい料理は本当に初めて食べましたから。」

「ありがとな。」

リオの頭を撫でるとやっぱり「んうあ…。」と気持ちよさげに声を漏らす。

そんな呑気なやり取りを続けているうちに村を出た時に利用した門に到着した。

「よう！！よろしくやってんな！！」

豪快な海賊の長か、と間違う声の持ち主は多くの門番を率いているバンス・フィルガーだ。

「バンスさん…。疲れてるのにあなたのようなテンションにできません…。」

「ガッハツハ！！だろうと思ったぜ！！ホレ、元氣ドリンク飲んできな！！」

2本の瓶を渡される。

元氣ドリンク

睡眠作用のある眠魚、発熱作用、滋養強壮、その他もろもろの作用のあるトウガラシを調査し、

眠魚の睡眠作用を打ち消した飲み物で、疲労回復などの効果がある。

リオに一本渡し、一気にあおる。ピリツと一瞬辛さが襲うが、すぐさま眠魚の薄い甘味が広がる。

「おいしいです！！」リオが歓喜の声を上げた。

「だろう！？元氣ドリンクがギルドに認定された飲み物でなあ。開発経緯は」

「そんな話はいいですから。ほらリオ、いくぞ。」

「わっ、待ってください！！失礼します！！」

わたたつとリオが走りだし、一人置いて行かれたバンス。そのでかい背中を縮ませていた。

「ぷっ、ククク…。」

周りで様子を窺っていた門番達は笑いをこらえるのに必死だったそう。

「依頼、完了した。」

ドスランポスの鱗を一枚提出し、そう言った。

「やっぱりハクさんは凄いですねえ。新米ハンターつれて異常発生したランポスとドスランポスを

相手にするなんて。」

「そう思ってる割には棒読みだよな？」

「報酬の2500ゼニーです。こちらはリオさんの分です。」

ああ、こうやってるから受付嬢はガードが堅いんですね、よくわかります…。

ジャラツと音を立てる袋を手にしてリオは跳ねた。

「やりましたあッ!!」

その笑顔に周辺にいた野郎共は撃沈、ついでに酒場の温度が5度上がった。

「どうします？このまま食べていかれますか？」

「ああ、そうするよ…。今日のお勧めは？」

「ハクさんを素っ裸にひんむいて、その美しい裸体に盛った

」

「そうか、なにもないのか。よくわかった。別の子にメニューだしてもらおうよ。」

「ああっ!？そんなイジワルしないでくださいよ!？」

「じゃあそんな変態な発言するなよ!？」

「うつつ、これはステータスです。希少価値です。」

「おい、どっからそんな言葉覚えてきた。オニサンはそんな言葉教えた覚えはないぞ!？」

「とりあえずこれがメニューです。決まりましたら呼び鈴で呼びください。」

俺達の後ろに人影ができたのを見、おふざけから仕事にスイッチを切り替える受付嬢。さすがだなあ。

お兄さんとても嬉しいぞ、うんうん。

ばわわああんとしてるリオを連れて適当な席をとった。

「……。」

ところがどっこい。

ハンターには腕に応じて階級がある。

ハンターランク

HRと呼ばれる階級制度なのだが要約すると、

《馬鹿》な初心者ハンターが《無謀》なクエストを受領させないレベルのような物だ。

が、それだけでは向上心が削がれるので、ギルドの酒場で注文できる料理、

ギルドハウスと呼ばれるドンドルマやミナガルデなどの都会に住むハンターに提供される住居、

はたまた泊まれる宿までがランクの向上によって程度も上がっていく仕様なのだ！！

まあ依頼の階級では下位、上位、G級と3段階に決まってはいるが下位でも上位並の強さの

モンスターがいたり、上位でも下位並の依頼があったりとアバウトすぎるのであてにならない。

HRに応じて借りられる宿のクラス《これもドンドルマなどの都会限定仕様だが》が

チェスの駒の名を借りて、下から順に

ポークラス、ルーク、ビショップ、ナイト、クイーン、キング、エンペラーと続く。

この説明はまたの機会にするとしよう。

話を戻すと、俺は豪華な料理を頼めるがリオが家庭料理並の料理しか頼めないというわけだ。

「…どうかしましたか？」

「ここは俺が奢るよ。」

俺がたどり着いた答えだった。

「そんな！？悪いですよ、弟子に食事を奢るなんて…。」

「いや、普通逆だろ？師匠が弟子に食事くらい奢らないとどうする

よ。」

「でもお…。」

「じゃなきゃ俺は食べない。」

「そんな！？意地悪ですう…。」

やっぱり俺はとことん性悪らしい…。

「じゃあそういうことで。」

リンリンと呼び鈴を鳴らすと数秒でギルド嬢が現れた。

「お呼びでしょうか？」

「アプノトステーキとガブリブロースのワイン煮込み2人前ずつで。」

「それと私は…、うう…。」

メニユーで目から下を隠して上目遣いでこっちを見つめてくる。

「好きなの頼んでいいんだぞ？」

「はい…。じゃあモストマトスパゲティとスネークサーモンのお刺身を。」

「かしこまりました。しばらくお待ちください。」

パタツと持ち場に戻って行った。

「あんなイジワルしないでください…。」

「意地悪か…、昔よく言われたな…。」

昔一緒に遊んだ少女を思い出す。いつもイジワルと言いながらも抱きついてきたっけ。

だがそんな思い出もすぐにかき消された。

「お嬢ちゃん可愛いねえ。どうよ？俺達と楽しいことしないかい？」

ありがち過ぎるし、お決まりすぎるセリフだろ。そう思いながらリオに声をかけた2人に目をやる。

木の幹のような体をした大男と、木の枝のような長身の男。

武器は大剣と太刀。手入れのされていない防具と見慣れない顔を見る限り、流れのハンターだろう。

俺達の周りの席のスケベな野郎達も睨みを利かせている。やっぱり

この村にいる男ハンターは
やっぱまともなんだな、うん。

「やつ、やめてください！……ハク様！……」

「やれやれ、手出さないと気が済まないのかい？君たちは？」

よつこらせと立ち上がり気だるげに話す。

「なんだてめえ！邪魔すんじゃないよ。」

大男。でかいのは図体だけじゃないんだね。

「邪魔も何もその娘の保護者なんだけどなあ……。連れて行かれるとかなり困るんだけど？」

「うるせえ！！」

おっとこの男大剣の柄に手をかけた。

ギルドの規律の中で人に刃を向けてはならないという鉄則がある。

伊達に流れのハンターじゃないんだなあ……。

俺は桜花に手をかけず手を掲げた。

ちようど眩しい時に目の前に手をかざすような感じで。

「おらあつ！！」

大男はアイアンソードを盛大に振り下ろした。

結果を予測してか、こちらを見ていた多くのハンター達が顔をそむける。

リオの顔も恐怖で引き攣った。

ガッ！！

空中で刃が停止した。

いや、俺の左手が刃をつかみ、停止させたのだ。

「ありえねえ……ッ……！！」

実質大剣を受け止め、体勢は微動だにしていない。

物理的にありえない現象を俺はやってのけた。

「こんな馬鹿でかい剣を君が振り回しても俺に傷はつけないよ？」

「クソッ……！！」

男は剣に力を込めるが、俺の左手は停止したままだ。

「うらあッ……！！」

長身の男が太刀を抜き放ち、俺めがけて振るった。

が結果は同じだった。

空いている右手で太刀の刃をつかむ。

「それは君も同じ。太刀筋が読めるんだよ、剣は軽いし。」

手に力を込め押し返すとブォン！！と空気を切り裂く音とともに男たちは吹き飛ばされる。

「なにやってるんですかーッ！！！」

ゲツ、受付嬢！？

「いや…、その…、ねえ…？」

近くにいた親父さんハンターに同意を求める。

「あ、ああ。この兄ちゃんはその娘を助けただけだ。んでそいつらは」

「武器を人に向けた！！！」

周囲の野郎共が目ギラつかせて、言い放った。

捕まえるだの、牢屋にぶち込めだの、ランポスの餌にしるだの言われ放題の男2人はテーブルの角に

後頭部をぶつけ、仲良くお休みしている。

「仕方ないですね、今度ギルドナイトの巡視が来た時まで反省してもらいますか…。」

パンパンと手を打ち鳴らすと屈強なお兄さん？が1人現れ瞬く間に二人を連れて消え去っていった。

なんだったんだろっ今の。

まあハンターとしての掟を破ったのだから厳しい処罰が下されるのだろうか…。

第九話　ゼヨゼヨ船長山城、ミス。参上！！（前書き）

何度目でしょう、前書きに小説かいちゃうの…。

おまけにレンジとオーブンを同時に使用して、ブレーカー落ちによ
って

小説のバックアップとってなくて最初っからっていう惨事…。

第九話　ゼヨゼヨ船長山城、ミス。参上！！

「お待たせ致しました。ごゆっくりお召し上がりください。」

ギルド嬢が料理を並べる。そして去った後リオが口を開いた。

「先ほどは助けていただきありがとうございます…。けどあんな危ないこと

しないでください！！」

目に涙をため、声を張り上げる。

「といわれても…。」

「言い訳無用です！！もう二度と危ない目に合わないと言いなさい！！」

…怖いですリオさん。

「……。」

「返事はイエスかYes！！その二択です！！」

あれ？一択じゃね？

「わかりました、もう二度としませんから。料理が冷める前に食べようね？」

「わかったならいいです。ではいただきます！！」

リオはモストマトスパゲティのソースとパスタをからめ始める。

俺もナイフとフォークを走らせ、アプノトステーキを小皿に盛った。

「ほら、おいしいぞ。」

「そんな、ご馳走していただくのに悪いですよ…。」

「遠慮されたら困るよ。もう盛っちゃったし、冷める前に。ね？」

「わかりました…。ではいただきます…。」

パクツとステーキをリオが食べるのを確認し、俺もかぶりつく。

ジュワツと肉汁が広がり、塩コショウが肉汁を緩和する。

「うまい！！」

「おいしい！！」

歓声は同時だった。

「ガブリブロースのワイン煮込みも食べるかい？」

「はいです!!」

そしてまた二人とも声をシンクロさせた。

周りの男達は憎しみを通り越して新たな境地を悟ったかのように穏やかな笑みで

2人をみつめていたそうなの…。

食事を終え、2人は村長に挨拶へ行くことにした。

村のほぼ中央に位置する酒場。そして村の南西端に位置するギルドの紋章の入った

塔。その真下の大きな家屋が村長の住居である。

モンスターの襲撃の際には村人を全員収容できる地下室まであるそうだった。

モンスターの巨大な骨でつくられた門には鐘が取り付けられてあり、来客を知らせる術となっている。

立てかけてあるハンマーを振りかぶり、盛大に鐘を鳴らす。

何度鳴らしても飽きないよい音だなあ…と感慨に耽ってしまう。

「ホッホッホ、そこまで大きく鳴らさなくとも聞こえるぞよ。にしてもお主は本当によくやるのう。」

玄関の重い扉を開けながら、村長が出てきた。

「リオもよくやったよ。矢の命中率もいいし。」

「そんなあ…。」

「2人ともよくやったぞえ。ホレ、褒美じゃよ。2人で食うがよい。」

どこから出したのか、氷結晶の入った木箱とその中に黄金魚を目の前に出す村長。

「いいのか？こんな高いの。」

珍味と評価され、市場でもかなりの高値で取引される黄金魚。それを褒美にとはいき過ぎ感を感じずにはいられない。

「いいのじゃよう。先ほど交易船の船長が船上で釣ったのでおすそ分けじゃと持ってきてくれたのじゃ。」

「そっか、なら夕方頃に取りに来るからそれまで預かってもらえるか？」

「遠慮しなくてよいぞ。久々の交易船じゃ、色々仕入れてくるがよい。」

「ありがとう、んじやいってくるよ。」

「ありがとうございます、村長さん。」

「ホッホッホ、ではまたあとでのう。」

港についた時にあたりは荷物でごった返していた。

タルがあたりを席卷し、木箱が申し訳程度に置かれている。

「今日中に積み下ろしを終えるぜヨ！！」

独特の口調、東洋の袴姿、背中に太刀を背負っている竜人族。

名前は誰も知らず、皆船長と呼ぶ。

「船長！！お久しぶりです！！」

リオが嬉々として叫んだ。

「その声は…。おお、リオ。最後にみたのは半年前、ロックラックへと送る時だったぜヨ？」

「相変わらず記憶力いいですねえ。」

「ハハハ、ハクも元気そうだなによりぜヨ！」

「あなたはよく覚えますね…。ドンドルマや向こうでも顔見知りが多いでしょう？」

「ハッハッハ。年をとるとな、若者の面倒を見たりするのが楽しくなってくるんだぜヨ。」

うんうんと一人頷く船長。

やっぱりこの人なら知っているだろうか…。

「彼女の行方は…？」

「ム？」

「ああ、ドンドルマで一度会ったぜヨ…。彼女もお主を探していた

ゼヨ。」

「なら今度会った時に俺はロクシエ村にいます…伝えてください。」
リオには聞こえない、かすれた声で俺は言った。

「承知したゼヨ。さて、交易するゼヨ！！」

物品名の書いた長 いリストをチラつかせながら船長は叫んだ。

「わぁッ！！モガ特産ハチミツじゃないですかッ！！ハク様、タル一杯分買いましょー！！」

「美味しいのか？」

「貴族が好んで食べるほどゼヨ。」

「値段もそれほど高くないね。他には…。インテリアも充実してますね…。まあ、いつも通りの調合用素材のセットを2つお願いします。」

「了解したゼヨ。そちらの出す品物はいかほどゼヨ？」

「オブジェ加工品としてアプノトスの頭骨は価値高いですよね？」

「ある程度の大きさが必要ゼヨ。」

「イャンクック程の巨大な奴です。こないだ森に行った時食料を忘れて。空腹に耐えかねてはぐれてたソイツを」

「あまりにもうまそうだったので狩ってしまったゼヨか…。ご冥福を祈るゼヨ。」

「冗談はここまでにして。家から取ってきましょーか？」

「いや、こちらの船員に荷車で運ばせるゼヨ。客へのサービスゼヨ！！」

「ありがとう。助かりま」

最後まで言えなかった。

「ひええええッ！！？」

情けない船員の悲鳴。

ゴロゴロゴロと爆音を轟かせながらこちらへ転がってくる大樽の山。

「ゼヨ！？」

「リオ！俺の後ろに下がるんだ！！」

船長は鞘を立て、俺は太刀を抜き放ち刃を逆にもつ。多分これなら

大樽に傷つかないから船長に

文句くらう心配がないと思う。たぶん…？

転がる大樽と地面の隙間に突き立て、勢いを相殺する。

そして止まった大樽に後続の大樽が次々衝突してゆく。が、ほとんどが横に受け流され、壁にぶつかり

停止する。

安堵するのもつかの間、今回の原因であるひと際大きな大樽が転げ落ちてきた…ッ！！

大タル爆弾G

通常の大タル爆弾にカクサンデメキンを調査し、威力を数倍上げた強力な爆弾だ。

その爆弾が交易船から棧橋へと転げ落ちる。

やばい、衝撃で信管入ったら死ぬる！！

「逃げるゼヨ！！」

船長は一目散に駆けだし、逃げ遅れた船員は海中へと身を躍らせる。

あれ？皆妙に手慣れてない？

「ふえああああ！！」

一人リオがパニックになっている。

「うぬあ！！つかまれえッ！」

思わずリオの膝と背中 hands をまわし抱き上げ、俺も駆けだした。

先ほどまで俺が壁がわりに使っていた大樽に爆弾がぶつかり…

ズドオオオオオオオオオオ！！！！

周辺の大樽10数個を吹き飛ばして、この事件はおさまったのだ…。

「ゼヨ…、とんだ赤字ゼヨ！！！！」

「殺す気ですかッ！？アレ確実に死ぬところでしたよ！！！！」

「すみません」。ハンターでもないのに一人で持とうとした俺がバカでした…。」

あれ、なんか心にどす黒いオーラがわき出してくる。

なんだろう？まあいいか…。

そう思案していると消え入りそうな声が聞こえた。

「もう…降ろして…ください…。」

顔をリオレウスもビツクリなほど赤く染め、ブレスの業火のように熱を持ったリオが丸くなっていた。

「恥ずかしい…です…。」

アイルーのように丸まって、顔の前に両手を出す仕草が可愛くて仕方が…いやこれ以上は自粛しよう。

「ご、ごめん。思わず…」

「いえ、助けていただきありがとうございます…。」

付き合いたての恋人同士のような光景に船長は思った。

「（この光景は彼女だけには見せられないぜヨ…。拙者の首が飛ぶ…。

）」

第九話　ゼヨゼヨ船長山城、ミス。参上！！（後書き）

え？さつさと狩り始めろって？

次の狩猟は相当文字数食いますからご期待を……！！

第十話 桜紅葉の舞姫（前書き）

にゃ〜ふ〜！

評価が少しずつ、けれど確実に上がってきてます！！

お気に入り件数も！！

みなさんありがとうございます！！

けどランキングでみるとまだ100位圏内…ッ！！

皆さまこれからも応援よろしくお願いします！！

第十話 桜紅葉の舞姫

風がなびくと共に私の黒髪を撫でる。昔彼になでてもらったのはいつが最後だったのか。

アプノトスの引く竜車の上で感慨に更けていた。彼の笑顔もぼやけ、輪郭しか思いだせない。

小さい頃の記憶が琥珀色に染まり色彩を失うように、彼との記憶も色のない世界に染まりかかっていた。

もう彼とは会えないのだろうか…。いや、まだ手はある。

大陸一の街ドンドルマ。そこで活躍し、もっと有名になればいくら彼でも気付くだろう。

「お嬢ちゃん！！ついたぞ！！んじゃ頼んだぜ！！」

アプノトスを巧みに操り私をここまで送り届けてくれた彼に礼を言い、私は自分の武器と道具を

持ち、竜車を降りた。肩にくる重みは竜車の中での退屈な時間のおかげの不機嫌だろうか。

刀を鞘から少し抜き、鋭い音が鳴るようおさめた。そしてアルコリス地方の《森丘》に私は足を踏み入れた。

「はぁはぁ…ッ。まだ…ッ、倒れないの…？」

私の目の前に君臨するは、空の王者雄火竜リオレウス。

堅い甲殻を持ち、血で染めたような巨軀から繰り出されるは死という文字が直結する猛攻ばかりだ。

体内の火炎袋によって生成される火炎液を発火させ、気管が焼けるのもかまわず敵に向かって

放出する灼熱のプレス。地表スレスレを滑空し吹き飛ばしたり、相手をその巨木の幹のような足でつかみかみ殺す攻撃。おまけにその爪や棘には毒まであるときた。下手に肉薄すれば尻尾でなぎ払われる。

王者の名にふさわしい誇りと強さを兼ね備えた飛竜である。

「グルアアアアアアアアアアアッ！！！！」

相手に対する威嚇か、怒号か。どちらかはわからない。が、その咆哮は本能を揺さぶり体は逃げたくて

震えだす。

「けどッ！！彼はあなた達を何度も相手にしてきたッ！！」

数時間の戦闘によって、私の体の疲労は限界にまで達していた。立っているとなぐさが震える。

視界もだんだんぼやけて、気を失いそうだ。

リオレウスも両翼の爪が砕け、その巨大な尻尾も無残な切り口を露にして斬りおとされている。

怒りを放つ頭部は鱗や甲殻が砕け、血が滲みだしている。

斬破刀を握りなおして、リオレウスに向けて構えなおした。

「私はもう一度彼に会うためにここでこれからも負けるわけにはいかない！！！！」

大地を蹴飛ばして、リオレウスに一気に肉薄する。

「ガルオオオオオオオッ！！！！」

小賢しい敵にブレスを放つが軽々しく避けられる。

それが彼の怒りを増幅させた。

口から燃え盛る炎を吹き出し、彼は体のリミッターをはずした。

「クッ！？」

突如走りだし、こちらへ向かって疾走するのを感じた瞬間に身を横に投げた。

その瞬間に耳元を掠める巨大な足爪に背筋が一気に冷える。

が、体のリミッターをはずしたことで盛大に崖に体を衝突させる。

「グガア・・・ッ！！」

うめき声を上げながらも、衝突のショックによって目をまわしたようだ。

今ならやれるッ

リオレウスの首元に回り込み、攻撃を放った。

斬り下ろし、突き、返し刃、そしてまた斬り下ろし。

首元から血が迸り、体勢の立て直しが聞かないリオレウスは悲鳴を上げる。

そして

私は精神を集中し、溜まった練気を一気に開放した。

体中から力が移動し、刃を包む。

その力を最大限に引き出す連続攻撃を放った。

右斜め上からの斬り下ろし、刃をすぐさま引き上げ、今度は左斜め上からの斬り下ろし。

刃を返して元の軌道を描く。血が溢れだし、リオレウスの首には十字の傷が穿たれていた。

そして一気に腕を振りかぶり、残った練気を残らず刃にのせて振り下ろす。

「ハアアアッ……！」

細い刀が地面に埋まるほどの力を込めて断ち切った。

「グガアアアアアアッ……！！！」

私は勝利を確信した。リオレウスの雄叫びが弱るのをこの耳で聞いたからだ。

が、彼はここでは終わらなかった。何がここまで彼を生へと執着させるのだろう。

ゆっくりと大地を踏みしめ、首から血を迸らせながら憎しみのこもった眼光を放つ。

リオレウスが首をもたげた。

まずい！！今私は壁とリオレウスに挟まれた状態だ。この状態でブレスを放たれれば、爆風によって

体勢を崩してしまう。その隙に攻撃されて死んでしまう。ここまで追い詰めたのだ。

そんなことできるはずがない！！

腰に吊り、もしもの時のためにと取っておいた閃光玉をつかんだ。

すぐさまピンを抜き、上へと投げる。直後、リオレウスの火球が放たれる前に

視界を眩い光が塗りつぶした。

「グギヤアッアア!？」

目をあけると苦しみ、哀れにもぐりリオレウスの姿があつた。

すぐさま移動しつつ攻撃を加える。

先ほどまで血の溢れだしていた傷口は血が止まり、瘡蓋になりかけていた。驚異的な治癒力だ。

倒れそうになる体に鞭を打ち、甲殻と甲殻の隙間に刃を走らせる。数回斬りこんだところで一度後退しようと思を吐いた時だった。

ブオオン!と空気を揺らす轟音とともに、赤い塊が左から迫っていた。

それがリオレウスの尻尾と気付く瞬間、私は跳ね飛ばされ壁に打ち付けられていた…。

「ガハッ!ゲホゲホッ…、ハア…ッ!」

肺の空気を全て吐き出し、内臓ごと吐き出したくなる痛みが体を襲う。

リオレウスが火竜の雄であり、その雌のリオレイア。陸の女王と呼ばれる彼女の防具だけあつて無傷だが、

衝撃によつて体中が悲鳴を上げていた。倒れそうになるのを必死に

こらえ、アイテムポーチ道具袋

から回復薬を2本取り出す。リオレウスがこちらを見据えている。

なんとか隙を見つけ出して

体力を回復せねば…。そのチャンスは幸運にもすぐさまやってきた。リオレウスが首をもたげ…、

「グッガアアアアアアアアアアアア!」

風がおこるほどの咆哮を上げた。レイアシリーズには防音スキルがついており、咆哮によつて

体を動かせなくなるのを打ち消せる耳栓効果がある。

回復薬を一気に2本飲みほした。緑茶にレモンを加えたような味が

広がる。そして体の痛みが少しずつ

ではあるが引いていく。

すぐさまこちらを睨むリオレウスに対して睨み返した。

やはり彼が怪我ひとつ負わず倒したように、私は華麗に倒すことができない。

けれどここで諦めれば彼と二度と会えないだろう。

そんなことは嫌だ！！彼と、会って話したい！！もう、私のことを許してはくれないだろうけれど

それでも彼ともう一度昔のように話したいッ！！

だから…、私は…

「こんな所で負けるわけにはいかないのよ！！」

「お嬢ちゃん！！大丈夫か？おい！！」

竜車を操っていた男が私のもとへ駆け寄ってくる。ここは森丘の拠点だ。ベースキャンプ

討伐完了の印の発煙筒を放ち、拠点に戻ってきたのだ。

「大丈夫…、回復薬を飲めばなんとかなるわ…。」

強がりを言ったが正直体はボロボロだ。残っていた回復薬を全て飲み干し、空瓶を道具袋にポーチ

入れる。

「じゃあ竜車の中で寝てな。それと帰ったら医者に診てもらえよ？ハンターは健康第一だぜ！！」

ニカツと歯を輝かせながら彼は竜車へと歩いて行った。

「終わった…。終わったよ…。」

空に向けてそう呟く。

私、紅葉洸こうもつほのかは夕暮れの空を見上げて願いを馳せた。

数日竜車に揺られ、やっとドンドルマにつきますわき出たのははやくシャワーを浴びてベッドに

飛び込みたいという欲求だった。が、強烈に暴れまわる欲求を抑え酒場へと私は向った。

「クエスト完了。」

ギルド嬢に火竜の鱗を一枚提示し、報酬金を受け取った。

ハンターランク

ギルドカードに飛竜の討伐数が書きされ、HRが上がりましたとギルド嬢が言うのを聞き流す。そしてそのまま宿を借りて酒場の上階にある部屋へ向かおうとしていた時だった。

「いたぜヨ！！一週間張り込んでやっと見つけたぜヨ。洗^{ほのか}」
独特の口調に振り返るとそこには竜人族の男が立っていた。

「奴にお主を探して伝言を言うよう頼まれたぜヨ。」

酒場のテーブルに座り、部屋で取ろうと思っていた食事を食べながら話を聞いていた。

「彼から…！？」

「そうぜヨ、あいつは今大陸西部のロクシェにいるぜヨ。知ってるぜヨな？防御力が高い地形で

貿易と交通の拠点となっている街ぜヨ。」

「ええ…、けど驚いた。彼は私をもう探さないと思っていたから…。」

「

「奴は悲しそうだったぜヨ。顔は平気そうにしてたぜヨが。」

「船長お願いがあるの。」

「何ぜヨ？」

「私を…彼のもとへ連れて行って」

第十話 桜紅葉の舞姫（後書き）

やああああああああ！！

キーキャラをやつとだせたよおおおおおおおお！！！！
よし精神力使い果たしました！！（早ッ

第十一話 少年の過去（前書き）

ヒイイイツ!!（。。;）

いつも小説をチェックしていただく担当さん。（名前を出そうとすると般若のような表情で殺すよ?と言…）

自前の原稿に執筆してチェックしていただくのですが、グシャッと握りしめ一言

「やる気あんの?」

冗談抜きでコワイデス（'；；;）

というか原稿用紙代がお財布から消えていくぅ…（

メールに書いてチェックしてもらおうかな…

けどそれはそれで叱られそうな…

第十一話 少年の過去

昔の話をしよう。シュレイド王国と黒竜が戦争する前のお話。ハンターズギルドという巨大な組織が

出来上がるお話。とりあえず大昔のお話だ。

文献などの記録にほとんど残っておらず、しかし今も多くの人に語り継がれる伝説。

100年ほど前までは人間はモンスターに太刀打ちできなかった。

武器は人間を殺せる程度の貧弱な物で

飛竜や古龍に対する術は無かったと言っている。そんななか当時は所在の知れていなかったココット山に現れた一角竜モノブ羅斯を討伐した5人組がいた。

その5人は当時の人類の希望だった。人間でも訓練し、強力な武器を持てばモンスターに勝てるのではないか？そんな疑問の希望を人々は確実に抱いて行った。

そしてドンドルマの大長老、彼がハンターズギルドを結成した。といっても今のような巨大組織では

なく、たった数人のハンターの所属する文字通り組合のような集まりだった。

モノブ羅斯を討伐した5人組は古龍と戦い、5人のうち一人が戦死した。

パーティーのリーダー格だった男はココット山の麓に村を開いた。それがココット村である。

彼はパーティーメンバーだった婚約者を失い、ハンターを引退した。リーダーの弟はジャンボ村を開いた。辺境でありながら拠点と拠点を結ぶことが可能な立地で

発展している。他の2人については所在が知れていないが、人々が数多の伝説を語り継いでいるので

（根拠がない話が多いので割愛する）どこかで生きていたのだろう

…。

100年あまりが過ぎ、ハンターズギルドはシュレイド王国と肩を並べるほどまで成長した。

といっても、まともに戦争をすればシュレイド王国に軍配が上がるのは明らかにも関わらず、

当時のシュレイド国王はハンターズギルドと条約を結んだ。

王国の守備はロイヤルナイトが一任されていたが、モンスターに対する力としてハンターズギルドとの

契約で王都、およびシュレイド城近辺を防衛するハンターが数人任命された。

非公式の面会としてシュレイド国王とハンター達が楽しそうに食事をする絵も残されていた。

そしてとうとう戦の日がやってきた。

シュレイド城のあるシュレイド地方近辺に位置する西竜洋。

赤道から流れる暖流と極地から流れる寒流の衝突し合っており、巨大なうず潮がしばしば目撃されている。またその影響か、現在の西シュレイド王国（シュレイドの後継）と東シュレイド（現在は共和国制になっている）の国境付近（旧シュレイド城が中立地帯であり、その付近一帯）では濃い霧が立ち込めている。

そんな中偵察の任務についていたロイヤルナイトの1個中隊が白い霧の中、黒い龍を目撃した。

すぐさま城へ帰還しようとした彼らに無慈悲な攻撃が襲いかかり、王に報告に舞い戻ったのは

たった数名だった。

シュレイド国王はハンターズギルドに連絡。

ハンターズギルドは大長老を始めとした幹部との協議に入り、敵は黒龍ミラボレアスと断定。

伝説として語り継がれ、今まで存在されていないとされてきた黒龍ハンターズギルドは余剰ともいえるほどの戦力導入を決定し、シュ

レイド王国もこれを承諾。

総勢40人、10個パーティーの英雄級ハンターが派遣された。

そしてシュレイド城と王都ヴェルドに古龍用の装備を新造。両方に古龍用砲台バリスタと対超弩級古龍用大砲を多数建造。決戦場となりうるシュレイド城に撃龍槍を配備した。

ロイヤルナイトにバリスタと大砲を撃たせ、ハンターは黒龍の進行を阻止する配置についた。

そして黒龍は待っていたかのように進行を開始した。堅い、その言葉を超越した鱗によって

無数に発射されたバリスタの矢と火薬の満載された砲弾はことごとく弾かれた。

ハンターによる地上からの攻撃も、剣は黒龍に届く前に主の体が吹き飛ばされ、ボウガンや弓による攻撃も黒い鱗に傷をつけることができなかった。

為す術の無いまま黒龍の進軍の勢いはとどまることを知らず、数時間でシュレイド城の城門に黒龍が

立ち塞がった。この時点で生き残ったのは15人8パーティー、ロイヤルナイト1個師団。

元の戦力が40人10パーティー、ロイヤルナイト2個師団、3個大隊だったのだから恐るべき威力である。

城門に仁王立ちになり、ロイヤルナイト及びハンターを見下ろす黒龍。

当時の国王は自分と息子だけ残り、他の大臣（最後まで王に仕えるといった大臣がほとんどだった）に

王妃と王女を脱出させた。

撃龍槍は使用されたが、黒龍の堅い鱗を剥がすことにしかならず、ほとんど打撃を与えなかったと

いっいいい。

そして軍門が下り、巨国と英雄級ハンターの多くが死亡した。

そして黒龍は王都ヴェルドにも侵攻。城壁を突き破り、王都内へ侵

攻したが、多くのハンター（記録には不特定多数と書かれている。同じく戦死者も不特定多数）によって侵攻をやめ、撃退に成功したが、あまりにも犠牲が大きすぎた。ここから数年は大陸全土に絶望の兆しがみえていた。

以上が記録に残っていた過去百年の主な出来事を大雑把に解釈した説明である。

俺が壊れかけていたあの時。現役ハンターでいつも巨大な飛龍に颯爽と立ち向かい、笑顔で帰ってくる

父さんの存在は大きかった。無論ボウガン使いのガンナーとして父親の背中を支え続けていた母さんも大好きだった。けれど2人は帰ってこなかった。俺のもとに帰ってきたのは父さんがよく被せてくれたレウスヘルム、母の肉片とレイヤガードだけだった。そして父母を待ち続け、俺は文字通り壊れかけていた。

ロイヤルナイト。ハンターなら嫌う言葉。王国の犬とも呼ばれ、昔とは違い今は王位継承権を持つ者の

近衛兵的役割を持っている。そんな彼らが誇りを失う前。ロイヤルナイトのある人に出会った。

「大丈夫か？ いや…、大丈夫ではないんだろうけれど。」

そう言い、俺に話しかけてきたのは若い青年だった。

多くの人々が俺に話しかけてはきたが、壊れかけている子供を気味悪がり誰も長く傍にいたくしない。けれど彼は違った。俺が口を聞くまで話しかけ、世話までしてくれた。

「大丈夫かい？ ほら、食材はこっやって切るんだよ。包丁をナイフのようにもたない。それじゃ食材が

殺されるみたいで可哀そうじゃないか。」

そして俺の歯車は動きだしたんだ。

第十二話 運命の戦争（前書き）

どーもおーw

サブタイトル運命の戦争。

ミラボレアスを日本語訳にするとそうなるんですね…

並大抵の防具じゃ即死しちゃうばかげた攻撃力のミラさん。
やっぱり一方的になっちゃいますよねえ・・・

第十二話 運命の戦争

王都ヴェルド。ドンドルマに匹敵する大都市で、西シュレイド王国の国王や貴族の住む街。

一見華やかだが、街の外辺には城壁が立ち並び、バリスタや大砲などのモンスターに対する設備が華やかさを削いでいる。そして裕福そうな街並みに対して、活気がない人々。

既得権益を貪り、人々から搾取する貴族によって人々の生活は貧困そのものである。

10数年前まではドンドルマ並に発展していたこの街も、王国の主が変われば勢いを失う。

暗い顔をした人々は自分達を襲うモンスターよりも、自分達に圧政を敷く貴族たちのほうが恐怖を覚える。そんな光と闇の共住している街の昔のお話。

「それじゃ、また明日。ちゃんと食べるんだぞ？それとしっかり戸締りもしておくんだよ。」

黒髪の青年は金色の装飾のされた純白のコートを翻して去って行った。

あの服は見たことがある。お父さんとたまに一緒にお酒を飲んでいたロイヤルナイトとかいう人たちが着ている服だ。けどあの人はみたことがない。

まあいいや、お腹すいたし食べようつと。

青年と一緒につくった（半ば無理やり手伝わされたが）シチューを食べると自分で作ったよりもおいしかった。なんかム力つく。僕がつくった料理よりもおいしいなんて…。

心に闘争本能の炎をボツと燃え上がらせる。負けない、負けたくない。

そうつ心に誓った。けど今思えば久しぶりに人と話したな。

お父さんとお母さんが「いつてきます」と言っ出て出かけてから2か月。

皆まともにお話してくれなかったし、しようとも思わなかった。仲の良かった友達は皆死んじやったり、怪我したりして会えない。それも皆あの黒い龍のせいだ！！

城壁を砕き、街中に侵入した巨大な龍を思い浮かべる。

ギルドの人やロイヤルナイトの人が必死の想いで撃退したあの忌々しき龍。

アイツにも僕は負けない…ッ！！

幼心にもそんな想いが宿った瞬間だった。

「おはよう、しばらく来れないから今日は作り置きするために食料を調達してきたよ。」

黒龍による被害で食料はギルドやロイヤルナイトから配給される携帯食料がほとんどの時だ。

どこから調達してきたんだろう。

「どこから取ってきたの？」

「ちよつと外に出てきたんだ。アプトスの肉、モス肉、ケルビ肉、各種キノコ。山菜も色々取ってきたんだ。」

背中に背負っているリュックを指さし青年は答える。

「なら…、どうして僕の世話をするの？」

昨日、初めて会った時に思った疑問。

青年は手を止め、ゆっくりとこちらを見た。

「いいのかい？君が今聞いたらとてもショックを受けると思うんだ…。それでも聞くかい？聞いて受け止める覚悟はあるのかい？」

「父さんにいつも言われてた。人を守る立場でありたいならいつでも覚悟を決めろって。死ぬ覚悟じゃなく、人を生かす覚悟を。自分を正気に保つ覚悟を。意味はわからないけどそれがとても大切なことってことはわかるんだ。」

「なら…話そう。けどこれを聞いて後悔しないでくれ。僕はこれ以

上後悔はしたくない…。」

「わかった。大丈夫。」

そして青年は語りだした…。

自分の命の灯が揺らめいているのはどうしてか、ということ…

撃龍槍使用許可が下り、青年は命令に従い撃龍槍のスイッチを押した。

発射の寸前に角笛が吹かれ、射線上からハンターや兵士が退避する。そして4本の巨大な鋼鉄の槍が黒龍を貫いた。

が、黒龍は鬱陶しそうにし、地面には剥がれた鱗が舞い落ちるだけだった。

そして黒龍が首をもたげ…、ブレスを放った。

『やられるッ！』そう思った瞬間衝撃と共に弾き飛ばされた。

ドアアアアアアアアアアアアアッ！！！！

爆音とともに先ほどまで立っていた場所が城門ごと吹き飛ばされていた。

残っている城壁は溶け落ちていく。すさまじい威力に身震いする。が、起き上がるうとするすると重みで立ち上がれない。

「大丈夫か？あんなところで突っ立っていると死ぬぞ！！」

リオレウスの素材をふんだんにつかったレウス装備とリオレウスの翼を模した大剣炎剣リオレウス。

バイザーで顔は見えないが体格と声からして男だろう。

「助かりました！！」

「礼はいい！！ここは撤退だ！！今すぐ逃げろ！！」

「は、はい！！」

撤退合図の笛を鳴らす。

「大丈夫でしたか？」

リオレイアの素材を使ったレイア装備に同じくリオレイアの素材を使ったボウガンヴァルキリーブレイズを背負ったハンターが駆け寄ってきた。

「ああ、大丈夫だ…。クソッ、ミリーもハウルも遣られた…。他のパーティーはもつとひどい…。」

「他のガンナー部隊には鱗の剥がれた場所を狙うよう指示してきましたが…、もはや撃退する力はないでしょうね…。」

「そんな！？我々が負けると！？」

「ここでの撃退は絶望的だ…。未確認だがハンターもロイヤルナイトも半数ちかく戦死している。

で相手は鱗が少し剥がれただけの無傷に近い状態だ。子供でもわかる数式だろう。」

絶句する。こちらは四万人規模の大部隊で挑んだのだ。

おまけに設備は超弩級古龍ラオシャンロンの襲撃を数回撃退できるほどの戦力である。

それがまったく言っていないほど歯が立たず、蹂躪されるがままという現状にどうしようもなかった。

ただ、ただ悔しかった。故郷を、友を、愛する人を踏みにじられるがままにされる現実に、

心が痛んだ。

「……。」

「もう一度いう、撤退しろ。聞こえないのか？」

「僕は…、最後まで戦います…。」

そう言い、無人のバリスタに近づいた。

バリスタの横に積み上げられているバリスタの矢を2本セットし、照準を合わせる。機械仕掛けの操作で

ゆっくりと左へ向く。傷口に照準の十字を合わせ、引き金を引いた。バアンバアン…！！

火薬の炸裂音。矢を装填していた弓の弦が解放され、矢は瞬時に加速する。

そして空気を切り裂き、黒い鱗の間の露出した肉の部分へ…深々と突き刺さった。

「ギヤアアオオオオオウ…！！」

黒龍が激昂し、仰け反る。その隙に矢を装填し、血の滴る傷口へと発射した。

今度は堅い鱗に弾かれ、矢が折れてしまう。

黒龍がゆつくりとこちらを向いた。怒号が走る。

「まずい！！逃げろ！！」

レウス装備のハンターが怒鳴り、レイア装備のハンターが女性とは思えない力で僕は跳ね飛ばされる。

凄まじい速度で接近した黒龍は口を大きくあけ、僕が先ほどまで立っていたバリスタ砲台を噛み潰した。

俺を跳ね飛ばしたレイア装備のハンターは左腕を残して、その顎門に飲み込まれた。

血が跳ね、僕の頬を濡らす。目の前には黒龍の顔……。そして自分を助けたハンターの左腕……。

「うわああああああああああ！！！！」

ハンターが激昂した。

そして大剣を振りかぶり黒龍に叩き込んだ。

抜刀切り

走りこんだ勢いを剣にこめて切り込む溜め攻撃に次ぐ威力を誇る技。ラオシャンロンの甲殻さえも叩き斬るその技を黒龍の額に叩き込んだ。

ガアアアアンツ！！と鉄を叩いたような音が響く。

凄まじい衝撃を食らった黒龍は城壁に頭を打ち付ける。男は攻撃を止めず何回も何回も黒龍の額を切り続けた。が、堅い鱗と甲殻に覆われた体は傷つける程度にしかならず黒龍もすぐに持ち直す。

一撃を受け、そちらへ首をもたげ黒龍がブレスを発射しようとしていた。

『やられる！！』

ハンターが危ない！！そう思った瞬間、黒龍の頭にいくつもの拡散弾が命中し、火だるまに変えた。

「何突っ立ってる！！早く逃げろ！！」

ボウガンを携えた何人ものハンターが拡散弾を連射し、黒龍の動きを止めていた。

「は、はい!!」

我に返り、走りだそうとする。が、すぐ肩を掴まれた。

「ヴェルドに息子がいる。息子は多分俺達を帰ってくると思って待ち続けると思う…。だからもしよければ君が息子の面倒を…見てやつてくれないか…?」

レウス装備のハンターが懇願した。

バイザーの奥からでも伝わってくる、願い。自分にも妹がいるからわかる。

「わかりました、まかせてください。」

頷き、見つめ返すとハンターは僕に背を向けて走り出した。

「こつちだ!!」

ガンナーのハンターに誘導され、僕はシュレイド城からヴェルドへのルートを把握した。

そして城を出る時黒龍の雄叫びと共に巨大な爆炎が城を包み、シュレイド王国が崩壊した…。

「これが…、僕の知ってる全てだよ…。君のことはギルドの人に聞いた…。今の騒動のせいで2か月もかかってしまったけれど、僕は恩返しとして君の成長を見届けたい…。」

青年は涙を流して、呟いた。

「父さん…、母さん…ッ!!」

涙が止めどなく溢れだしていく。悲しみ、憎しみ、喪失感。数多の感情が渦巻いてめちやくちゃだ。

「君の両親は本当に強い人だよ…。」

「……ッ」

嗚咽を堪えても、涙は止まらない…。

俺はこの時あまりにも多くのものを失いすぎた。両親が生前に溜め

ていた貯金によって今も不自由なく暮らせるが、俺の希望は両親が全てだった。

強さ、誇り、知能、道德。全てを両親から学び、そして受け継いだ。そこから俺の運命の戦争が始まったんだ。

父さん、母さん。

今、俺は2人に敵うような立派なハンターにはなれてません。

あれから色々なことがあつて、色んな人に出会った。

一時期はパーティーを組んで、楽しい日々を過ごした。

けど俺のミスでパーティーメンバーが全滅した。

守ると誓っても守れないちっぽけな自分に嫌気がさしたけど

いつも俺を支えてくれる彼女がいた。

けど彼女にも俺はひどいことをしてしまったんだ。

もし今度会って謝ることができたなら、その時また書きます。

安らかに

第十三話 紅葉響へいつよつひき「レポート」(前書き)

おまたせいたしましたあ!!

久しぶりにアクセス数を見ました!!

「3000行ってたら嬉しいなあ」ワクワク「しっつ見ていたわけですよ!!」

そしたら

7234アクセス (。 。)ポウッ!?

(っ q)ゴシゴシ

7234アクセス (。 。)ナヌン!?

ユニークアクセス2518 (。 ノ 。)ノナンニイイ!?

とても嬉しい数値でして発狂してしまいました。

近所の方に朝

「昨日精神科呼ばうかと迷ったわウフフ」なんて怖いことをいわれちゃいました…

皆さんありがとうございます!!

これから誠心誠意尽くしますので!?

応援よろしくお願いします!!

第十三話 紅葉響へいつよつびき レポート

このレポートは単なる個人の日記として読んでくれれば幸いだな。事実とそこから浮かび上がる推測を書いた記録として読むには少し曖昧な部分が多いと思うんだ。

もし、このレポートに出てくる人物がこれを読む時が来るならば、僕は大切に保管してほしいと願う。

月 日

ハンターに助けられ、ヴェルドにたどり着いた。城壁を潜ると、そこには凄まじい数のハンターがいた。そのほとんどがボウガンを携え、人の握りこぶし程度もある拡散弾が樽詰め状態で散乱してた。黒龍に最も効く拡散弾をギルドが大量に輸送したらしい。

シュレイド城攻防戦で生き残ったのは結局ロイヤルナイト1個大隊、2400人しか生き残れなかった。

生き残ったロイヤルナイトも、バリスタの操縦に駆り出されることになった。

配置は数メートル間隔で配備されているバリスタの間にハンターが2人。拡散弾を黒龍に向かって放ち、

動きを止めたところでバリスタで傷口を集中攻撃するというものだ。城を出て、2時間。とうとう霞の中に巨大な黒い影が現れた。

結果から言うと多大な被害を出したが黒龍の撃退には成功した。

黒龍が射程内に入ったところでハンターが一斉に拡散弾を発射する。内部から爆弾を飛び散らせる弾丸、弾丸の中に弾丸を入れてそれを直撃の瞬間に起爆させ目標を襲う弾丸。細かな種類は違えど凄まじ

い炎に黒龍は襲われた。

僕自身バリスタを撃ち続けたけれど、ほとんど消耗戦だった。城壁が突破され、市街地に向かってプレスを放つ黒龍。

あいつの一撃一撃によって何人もの人々が死んでいった。

最終的にとられた方法が、ラオシャンロン撃退戦に使用されるありったけの爆弾を起爆させる戦法が採用され、多くのハンターとロイヤルナイトが巨大な爆弾を担ぎ、無残に散って行った。それがヴェルド攻防戦の大まかな流れだ。

月 日

レウス装備のハンターの無念に報いるため（彼が無念だったかはわからないが僕個人としては無念だ）

ギルドナイトに情報を求めた。機密だと、ギルドの関係者ではない貴様が知ってどうすると何度も拒否されたが、ついに今日情報を得ることができた。

復旧の視察に来ていたドンドルマのギルドマスター大長老が了承してくれた。

2か月もかかってしまったけれど今行くよ…。

月 日

さすがに3時間ぶつ通しで無視されるのはつらかったな。

けどやっと口を聞いてくれて好きな食べ物がわかったことと、まだ精神が壊れる前だったことに安心した。

ほのか 洸とも仲良くしてくれるといいな。

月 日

今日は洸を連れていくことにした。

家はまだ復旧が進んでないから、不便だし家財道具や必要な物だけ

を借りた竜車にのせて行つた。

僕のパラディンランスを見た時の彼の顔は忘れられないな…。

月 日

洸が珍しく笑顔だった。

無口でよく同じ年の子供たちに苛められている洸が。

なんでも彼が集団でイジメられている洸をたった一人で助け出した
そうだ。

洸と彼が仲良くしている光景はほんと微笑ましいな。

月 日

孤児の処遇をどうするかの会議が始まった。

おそらく孤児はドンドルマや各都市のハンター養成学校へと送られるか、孤児院を新設してそこで育てるか。

けど王国とハンターズギルドは今回の戦争で疲弊している。

恐らく多くの子供たちが見捨てられることになんじゃないか…。

彼も下手をすればそんなことになりかねない。

あのことを彼に言ってみるべきかな…。

月 日

彼はあのことを承諾してくれた。

それと『兄さん』って呼んでくれたな…。

月 日

彼が朝食の時にとんでもないことを言いだした。

『復旧の手伝いをする。』

彼は家の倉庫から大量生産されており、民間でも使用されているハンターナイフを持ち出していた。

現状は崩壊した城壁の復旧はまったく進んでいない。

付近のモンスターがヴェルドにかなりの頻度で攻めてくるからだ。

黒龍のおかげで住処が荒れたのだろう。復旧作業はハンターとモンスターとの戦闘に阻まれていた。

月 日

朝、起きると彼がいなかった。

そしてハンターナイフも。

急いで城壁へと向かうとそこには寝ぼけ眼のハンター達を圧倒し、モンスターを一太刀で仕留める彼の姿が

あった。歴戦のハンターであるはずのプロが、素人同然の少年に見劣りしている。

その光景は印象深く、戦闘指揮のギルドナイトすらも見惚れていたんじゃないだろうか。

月 日

彼と一緒に外に出た。

正直なところ僕のほうが足手まといだったなあ…。

兄さんシヨックだよ!?

剥ぎ取りだけは教えることができたけど、やっぱり調合の知識も違うからビックリだ。

月 日

洸が僕に相談を持ちかけた。

ここに記録させるのは彼女の名誉に関わることだから伏せるけれどやっぱり妹も乙女だということに安心した。

月 日

かなり間があいてしまったな…。

実際このレポートも今日が最後だろう。

色々なことがあって、彼と洸は成長した。

実の妹である洸と義兄弟になった彼。

血のつながりはなくても…、なんて言葉があるけど僕は二人とも愛しているよ。

ハク・スケイスっていう小説に出てきた名前をつけてしまつてごめん。

けど孤児の処遇から免れるには色々面倒なことが多かったんだよね…。

名前が思いつかなかったことは正直に言うから許しておくれ…！！許してくれなかったら兄さん泣いちゃうからな！？

それと、たまには兄さんのこと思い出してくれると嬉しい。

忙しいだろうからいちいち足を運ぶことなんてないから。

兄さんがいなくても2人でがんばってくれ。

あんまり心配させるなよ？

あの世でも君達に神経をすり減らすのはもうごめんだからね！！

村長宛に届いた分厚い本。その本を読み終えた俺は、感情の為がままにするしかなかった。

兄さん…。

最後に泣いたのはいつだったかな…。

久しぶりに仮面の上の感情ではない、心の感情が動いた気がした。

ベッドの上で明かりをつけずに読んだせいかな、しみる目に溢れる涙が心地よい。

はあ…、やっぱり兄さんは最後まで変わらないんだな…。

宛先を見ると『シュレイド王国』としかかかれていない。

もし洩が俺に送ってきたとするのなら、兄さんの願いに背くことだから彼女がする筈がない。

彼女が俺で、俺が彼女でも絶対に兄さんの願い通りに保管する。
ということとは彼女が…？

数多の兵と家臣に囲まれ、悲しそうな顔をする彼女の顔が脳裏を横切る。

まあ…、可能性がないわけではないが普通に考えて仕えていたロイヤルナイトの日記を彼女がもっている筈がないよな…。

口元に手をあて、考えこむがまったく心当たりがない。

ん…、まあいいか。

その結論に達した時に俺の心は震えあがった。

「ハク様あ！！ここにいらしてたんですかあ！！！」

ビューンという感じで突っ込んできて左腕をつかむリオ。

「なっ、なっ、なんだ！？」

文字通りなんだ！？いきなり人の部屋をパターンと空け、左腕をがつちりホールドされたこの状況。

あ、意外と大きな弾力が…。いかんいかん、狼になつては俺の人生終わりがねん。

いや、終わってしまう！！

「はっ、はなせえッ！！」

腕を引き抜こうとした。

うん、腕を引き抜こうとして持ち上げたんだ。なのに

「ひあっ！？」

なんとリオごと持ち上がってしまいました。

なんて力で掴んでるんだコイツは！！

「はなせ！！これは色々とまずいんだああああッ！！」

ブンブン振り回すが、離れようとしないうリオ。

「目がまわりますう！！」

「なら離せえッ！！」

「いやですう！！」

「うわああああッ！！」

結局リオに話を聞くから離してくれと懇願して俺が解放されたのは
一時間も後だった。

腕が筋肉痛になってしまったぁ…。

殺風景な俺の部屋のベッドで2人で腰掛けていた。

「ついさっき巡視のギルドナイトの方がいらしたんですよ…。」
しみりとした語り口調でうつむきがちに話すリオ。

「で、お会いしたのでご挨拶したら…。」

「ん？」

「ロックラックのハンターズギルドじゃあ弓は使用武器に認められ
ていないって言われたんですう…！」

「…はい？」

「今まで修行してきた意味がなかったんですう…！！！」

「……。」

おい、ちよつとまて。

リオは養成ハンターで、きたよな？

つてことはロックラックに戻るつてことだ。

なら向こうのギルドは使用武器について通達しているよな？

「お前…、まさか使用武器を忘れてたんじゃ…。」

「ウエエエエエエエエエエエエエエエエッ…！！！」

潤んでいたリオの涙腺が決壊した。

「泣くな…！泣かれると困る…！」

「えっぐ…、だって…ハク様が今まで親切に教えてくれたのに…、
それが無駄になっちゃったんだもあん…！！！」

いつもの口調が壊れているあたり相当ショックなのだろう。

なんというか、日記にあった昔のことを思い出した。イジメられて
泣いていた泔を慰めてあげたっけ。

そう、こんな感じにそつと抱き寄せて…

左腕をリオの背中に回し抱き寄せ、右手でリオの頭を撫でた。

「大丈夫だ、またやり直せばいいじゃないか。何度でも俺はやつて
るから……。だから泣くなよ……？」

ゆっくりと……、心に浸み込むよう願いを込めて囁いた。

腕の中で嗚咽をこらえていたりオがだんだん大人しく息をするようになった。

—安心だな…。

「はい…、わかりましたあ…。…ふう」

リオからもゆっくりと腕を回してきた。甘い香りが鼻腔を刺激して、理性を破壊しようとする。

『なんというか…、小さい頃の洗にそっくりだな…』なんて考えを抱いた。

「んう。」

あれ？寝言が聞こえた気がする。

リオの顔を覗き込むと、目を瞑り寝息を立てていた。

細い眉。その下の翡翠色の瞳は瞼に塞がれ隠れている。小さな鼻からは絶えず息が入り出す。

薄いピンク色の唇はムニユムニユと何かを食べる仕草をしてる…。
 ってまでよ？見惚れてる場合じゃない！！今の状況を整理すると

リオは俺を腕でがっちりホールド

俺逃げられない

リ才寝てる

\\(\\wedge O \\wedge) / オワタ

うあああああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！！

少年の心の叫びが初夏のロクシエ村に響きかけて止んだそうなの…。

登場人物紹介・メインキャラクター編・（前書き）

20話あたりで一度区切りをつけてキャラクターの紹介にしようかなあ…と思ったんですが、友人から

「いい加減キャラクターのプロフィール教えろ！！特に女性陣の！！」

と脅されました（蹴

血走った眼で

「リオのスリーサイズがわかるぜヤツホオツウ！！」なんて叫ばないでほしいものです（´、`、`）

あ、もちろんスリーサイズはかきません（うあい！

書いた暁にや本当に立場が危うく（蹴

登場人物を全員書こうとしたんですがなんと読む気が失せてしまうほどの長さになってしまいました。

なので5話ずつキャラクターをサブキャラ編、脇役編（蹴）とわけてかこうとおもっています

長ったらしい前書きですがご了承くださいな（

登場人物紹介・メインキャラクター編・

・ハク・スケイス・

・年齢 17歳

・誕生日 8月16日

・出身地 王都ヴェルド

・Spec 身長175cm まだまだ成長中
体重62kg

身体能力基本的な動きは朝飯前。間合いを取るために
蹴り中心の格闘を行うこともしばしば
腕力は凄まじく、工房で容易く生産できる程度の大剣な
らば素手で受け止めたり…

・髪色 髪型 白髪（原色は漆黒） 邪魔にならない程度の長髪

・眼色 ラベンダー

ハンターランク
・HR HR40上位ハンター（フロンティアや3triのHR
で設定）

・現使用武器 太刀 鉄刀神楽《桜花》

・過去使用武器 片手剣 大剣 ランス ボウガン

特別な修行が必要のない武器を相手やPTによつ

て
ていた
使いまわし

・現使用防具 ランボスシリーズヘルメット無し

この小説の主人公であるハクさん。

前回の十三話紅葉響（こうはびびる）レポートにて名前が本名ではなく、孤児の処遇から免れるためにつけられた偽名であることが判明しました。というかさせたんですg（略）

東洋人、というか黒髪が東洋か移住者にしかないので東洋人という設定で…。

女の子の好みは私と同じにしました、というか書いてる時のニヤニヤが止まりませんでした（キモツけど

「おつ、可愛いな」とは思っても好きにならず、かなり一途なお方。基本的に人付き合いは事務的にこなして人とあまり深く関わらないようにしてます。

防具は一番悩みました…。

詳しいことはネタバレを含むので省きますが、やっぱりドラゴンボスの爪で腕を切られるくらいの防御力の防具ってなかなか無いですよね…。

イメージは某アニメの某執事さんのイメージにさらにNHK某アニメの主人公をプラスした感じで…

すみません。まったくわかりませんよね…。

イメージ通りに書いてくれる同級生に書いてもらいます…。
いっつも書いてて楽しいキャラクターです。

- リオ・ルクスライト -

・年齢 16歳

・誕生日 7月29日

・出身地 ドンドルマ

・Spec 身長162cm

体重48kg

体力は一般ハンターの平均以上、腕力は女性ハンターの平均級。

・髪色 髪型 金髪 腰まで届くストレート

・眼色 サファイア

・HR ハンターランク HR3 下位ハンター

・現使用武器 弓 ハンターボウ？ ロックラックのギルドでは弓を認可しておらずボウガンに移

行決定

・使用防具 ランポスシリーズ

基本的にポケポケのリオさん。容姿のイメージとしてはスレンダーで清楚なお姫様って感じでしょうか。けどタイトルの晴姫ハレヒメの名の通りすっごい明るい女の子。

ドンドルマで生まれ、幼いころにロックラックに移り住み、離島であるモガの村へと移住した変わり者。

礼儀正しいけど、涙もろかったり自責が強かったり。

料理は壊滅的で飛龍さえも倒せそうな生物兵器を生み出せる超人的なスキルを生まれながらにもつお方。

今度は何を仕出かしてくれるか本当に楽しみな子です。

こうゆうほのか
紅葉洸

・年齢 17歳

・誕生日 9月27日

・出身地 ヴェルド

・Spec 身長159cm
体重47kg

根本的には一般的な女の子。

しかし上位ハンターということとハクの動きを見て育
っているため

所々凄まじく秀でているところがかなり…。

・髪色 髪型 黒 ショートヘア

・眼色 赤

・Hunter Rank
HR 36

・二つ名 桜紅葉の舞姫

・現使用武器 斬破刀

・現使用防具 レイアシリーズ

メインヒロインの洗さん。え？メインヒロインは普通最初じゃないかって？

はいそうなんでs（略）

『狩りに生きる』の取材記者を助けたことから記事に取り上げられ、実力と相まって二つ名を冠した

経歴です。ハンターの高みを目指す理由はハクともう一度出会っためでした。

凄まじいほど一途で（といってもヤンデレじゃないです、普通に純粹な女の子です！）

リオレウスのブレスが直撃しそうになってるハクを見ると射線上に割り込むんじゃないかと心配なほどで

ホントハラハラします（

好物は緑茶だったり、和食大好きだったり現実世界で言えば完全日本人。

第十四話 小狼と舞姫

青。文字そのものの意味で表わす初夏の海。自らの白さをひきたてるためかもくもくと入道雲が夏らしい空を演出していく。真つ白なキャンバスに絵の具をぶちまけ、白い絵の具を指で塗ったような感じで綺麗だ。そんな爽快な空と対照的に私の心は真つ暗闇に陥る。

「…フウ。」

黒いショートヘアを風は櫛で髪を梳かすかのようにあおる。

「そんなに考え込まなくてもありのままを伝えればいいゼヨ。」

背中にも空と海の青を宿したかのような太刀を背負った竜人族の男が言った。

「そんな簡単に言えるなら、私はもうとつくに彼に会いに行つてたよ…。実際大陸中から彼を見つけ出すのは船長がいなかったら…、彼から私を探してくれなければ不可能だったけれど…。」

両手に顔を埋めながら、背の高い竜人族の男『船長』を見上げる。

「フーム…。」

私は今船長の舟に乗り、ドンドルマからロクシェ村への旅をしている。

実際に竜車や定期舟に乗れば一週間もすればたどり着く距離ではある。

が、ドンドルマから数多の街、村を立ち寄り交易によって利益を上げながらロクシェ村へ寄港する彼の舟に乗ったわけは時間が経つてもやはり彼の人情に甘えたくなくなってしまう。

やはり人肌恋しくなってきたのだろうか…。

ますます沈んでいく気分の中、硬いブーツに柔らかな感触が当たった。

「プー…。」

名前を呼び、私は『ソレ』を抱き上げる。

豚ではない、決して。豚といった奴は私の斬破刀で両断してから海

に捨ててやる。ガノトトスに喰われてればいいんだ、そんな奴。

プーギーと呼ばれる女性に大人気のペットだ。フワフワもふもふかふかとぬいぐるみのような抱き心地に加え、愛嬌も抜群なまさしく天使のような動物である。豚ではない、決して。

「プギッ！」

「プーは優しいね…。船長ったらまともな励ましの言葉さえ、与えてくれないんだから…。」

「プーッ!!！」

「ゼヨッ!？」

私の一言とプーの怒りの態度に船長はたじろぐ。

「そんなことを言われても困るゼヨ!？拙者はあくまで船長であつて万能ではないゼヨ!!！」

無駄に船長だけ強調して言う180を裕に超える背丈の高い男。そんな男が身長150cm代の女の子にたじたじになっているところをみるとやはり女の子というのは侮れない。

「フフッ、冗談だよ…。」

少しだけ晴れた心に夏の潮風が爽やかに凧いだ。

「絶対知つてたよね？」

「(ニコニコ)」

比較的やさしい言葉で受付嬢に尋問する。

リオのロッキラックでの使用武器の件はドンドルマではなく、この村を向こうのギルドは選んだのだから通知が来ている筈だ。数人いるギルド嬢を束ねている彼女が知らない筈がない。

「だってえ…、可愛い女の子と2人きりで同居生活なんてハクさんが絶対喜ぶと思つたんで…。」

「思つたんで…、じゃない!!勝手に人の心の中を決めつけるなよ!？」

「けど、ドッキリはありましたよね？お・約・束

「うつ…、ま…まあそりや…。」

「ならチャラです。」

「うおい…！」

「ということは置いて、他の二人は知らなかったのか？」

なっ、なんてことを聞いてくるんでしょう。

本当にハクさんには困ったものです。これには少し機密が関わっちゃうので話すべからず…ですよね。

「どうやら他の2人も忘れてたようです。太刀使いに、ハンマー…。パーティー思想としては前衛2人の支援のガンナー…といったところでしょうか。」

「太刀にハンマーか…。相性が悪いと思うんだけどなあ…。」

確かに仲間を打ちあげてしまうハンマーと流れるように範囲攻撃を繰り出す太刀との相性は最悪です。

仲間に攻撃をあててしまったことが原因で全滅することも珍しくないです…。

まあ話しの本題からハクさんを誘導できたのは大きな収穫です。ほつ、よかったあ…。

「で？」

いきなりハクさんが口を開きました。

「今日俺を呼んだのはこんな世間話をするためだけじゃないと思うんだけど？」

「えへへ、バレてしまいましたかあ。」

おどけたブリっ子キャラを演じて頭に拳を打ち付けちゃいます。

「そんな演技はいいから。」

うー、もう少しだけ演じさせてくださいよお。

「はい、どうぞお！」

口をとがらせてブーブー言ってみますが華麗に無視されちゃいます。まったくこの人ったら他の男性と違ってツボがどこかおかしい気が

します。他の男性ならすぐに騙せちゃうのに。

本心からブーブー言ってるハクさんが顔を上げました。

「そんなに拗ねない。君の空いた日に付き合っただけだからそれで勘弁してくれ。」

片手で謝るポーズを取った後に鋭い眼で言われました。

「リオには言っただけ。それと横で酒飲んでるオッサンにも口止めしな。これは俺一人でやったほうがいい。」

名指しされ、チビチビとドギツイお酒を飲んでいたハンターがビクンと震えあがりました。

「どうしても、ですか？」

「こんなもん見せて行くっていったら…、アイツ絶対止めに来るだろ？」

クレスト用紙をヒラヒラ振って不敵に笑うその姿は普通にかっこいいです。

やっぱり罪作りですね。

「私たちとしても全力でサポートさせていただきますが…、無理しないでください。」

「生憎、ギルドのサポートはいつも期待してないよ。」

ムムム、なら私たちがいかに大切かを思い知らせてやります！！そんな闘争心が燃え上がった瞬間です。

「支給品届くのは遅いし、予想外のモンスターは出現するし、ましてや拠点のテントはぶッ潰れてたりするし。」

あうううううう！！ダメ出しのオンパレードです！！どうしまし
よう！！

「でも、まあ君のサポートにはいつも感謝してるさ。」

俯いた顔を上げると彼は「いつてくる。」とだけ言い残して去った後でした…。

さて、どうしたものか。

クエストを仮受注（指名されたクエストなので俺の独断でパーティーメンバーを決めることができる。）し、家に装備をとりこに帰りながら俺はふと考えた。

今回の相手は厄介だ。多少…とか考え事をしながら戦って勝てる相手ではない。

現在の装備である『ランポスシリーズ』と『鉄刀 神楽』では未確定戦死になるに違いない。

だからといって今まで使っていた大剣や片手剣などの数種類の武具は太刀にすると決めた時ほとんど売ってしまった。もしもの時のために…と残しておいた武器も一応はあるが勘が鈍ってまともに扱えるかどうかはわからない。さて…、どうしたものか…。

自分の信念を捨てて、フェシリーさんに素材を渡し、制作してもらうか？

いや、最低でも1週間はかかる。そんな期間があれば別のハンターに頼む方が早い。

しかし、事態が深刻だ。残された方法はひとつ。

あの頃につくり、放置して倉庫で埃を被ったあの装備を身に纏い、剣を繕ってもらうしかない。

そう決めた俺は家へとダッシュで向かった。

リオは村長に呼び出され、説教中である。といっても2人してゆーっくりお茶菓子を食べながら、のんびりと談笑しているだけであるが。受付嬢と村長とで組んだのであろう。さすが村長。

え？受付嬢は褒めないのかって？だってあの子が思いつくわけがないじゃないか。言っちゃ悪いが。

一気に倉庫まで進み、アイテムボックスを荒々しく空ける。

埃が舞い、長らく空けてなかったことを意味するかのような臭いが鼻をついた。

「くっさ…、掃除しとくの忘れてた…。」

咳き込み、埃を吸い、また咳き込む。だめだこりゃ。取れそうにな
いや。

一度外に出、ハンカチを口周りに巻きつけ再び進む。

眼がチクチクするがこの際無視だ。

ゴチャゴチャの魔境と化したアイテムボックスから装備品を取り出
す。

紅蓮に染まり、王の威厳を宿した装備。『レウスシリーズ』

リオレウスの攻撃性をそのまま表したかのような姿に灼熱の紅。^{アカ}王

の力が宿るその身には溢れるがごとく戦闘衝動と力が湧き上がる。

あの頃から二度と使うまいと思っていたが…、使わないといけな
くなるなんてあの頃に思っていたらうか。まあこのクエストが終われ
ばまた…。

またがさごとアイテムボックスを漁り、今度は大きな麻袋2つと
素材を取り出す。

片方には防具、もう片方には素材を放り込み俺は立ちあがった。

3日あれば終わるだろうか？

せめて2日…、それだけあれば必要な道具も揃えられる。

顔を覆っていたハンカチを剥ぎ取り、麻袋を背負い俺は走り出した。
目指すは市場の出口の工房。現在は朝市の開催されている午前9時。

……アレ？俺たどり着けるかな？

かなりの遠回りになるが大きく市場を迂回するか、大きな荷物のせ
いでほとんど進めないが直線距離の市場を突っ切るか…。

狩りの準備前に俺はとてつもない大きな壁にぶち当たってしまった
…。

「うおおおおおおお！！！」

とてつもなく勿体無いがゲリヨスを倒した時に入手した狂走エキス。
そして人の腹を満たし、スタミナをつけることができるこんがり肉。
その2つを合わせ、無尽蔵なスタミナを一定時間得ることができる

強走薬グレートを俺は飲み、ひたすら走った。この時間帯は人の少ない市場の外周、すなわち住宅街を。

俺の声に驚いたのか、窓を開け外の様子を窺う村人。が、しかしまたか…と呟くと窓を閉めてしまう。

またか…ってひどいな！俺はそんなに大声で走ってばかりじゃないんだぞ！？

俺の家は市場の入り口近くに位置する。で、工房は市場の出口。つまり間逆。

強走薬グレートが持つ時間は約10分。といってもスタミナは尽きなくとも体が求める酸素は尽きないわけがない。心臓は早鐘を打ち、気管が焼けついたような痛みに襲われる。

両手には重い荷物で塞がっている。重さで肩がギシギシと悲鳴をあげてしまう。

うう…、誰か助けて…。

そんな弱音を言いかけた時にようやく俺は工房にたどり着いた。礼儀なんて言葉が存在しないかのようにドアを開け、中に入る。

ムツとした熱気が気管を襲うが焼け付いた気管には不思議と心地よかった。

「どどどないしたんやあ！？」

鍛冶屋のフェシリーさんが驚いた顔で振り向いた。

「こっちの…、防具…、耳…栓…、こっちは…飛竜刀…朱…。」
キレギレに話すとフェシリーさんはポカンとしていた。

「緊急を…、要することです…。2日で…、仕上げれますか？」

息を整えると、工房内の熱気にむせかえりかけた。今までよく自分は我慢できたな…と思ってしまう。

「あ、ああ…。防音殊ならもう持ってきてとるやろ？なら半日でそれは終わる。飛竜刀となると徹夜でギリギリやな…。おい！！バズウー！！」

「ニヤッ…！！」

どこから現れたんだろう。アイルーが突然足元に出現した。

「レウスシリーズに耳栓や。今ある予定繰り上げてさっさと終わらせい！！終わったら徹夜で飛竜刀朱や！！」

「SIR！YES！！SIR！！！！」

兵士顔負けの直立不動の敬礼をこなし、自分の体を大きく上回る麻袋を抱えてアイルーは部屋の奥へと消えていつてしまった。

「にしても…、本当にええんやな？後悔はないのかいな。」

フェシリーさんが心配そうな面持ちで言った。一応彼女も事情を知っているからのことだろう。

「俺が今動かなければ…、まあドンドルマへの伝令はもう走っているとのことです。1週間もすれば、代わりのハンターが討伐に向かうでしょうけど…。1週間も時間がかかれば間違いなく人命は失われる。」

やっぱり俺はあの2人には敵いませんよ。」

苦笑交じりに言うフェシリーさんは豪快に笑った。腹を抱え、地団太を踏みながら。

「アッハッハッハッハ！！そら村長と受付嬢に口で勝とうおもたら1000年経つても無理やろうな！！」

「ホント、あの二人のコンビには飛竜も逃げ出しかねませんから…。」

「んじゃ、ええんやな？」

後悔が無いと言えは嘘になる。あの頃に犯した罪を払拭するまで二度と纏わないと誓った防具を纏い、新たな力を得ようとしているのだから。

けど、これで罪を償えるなら…。俺が納得しなくても世界が許すというのであれば…。

いつまでも意固地な信念を振りかざす必要もないように思えてきた。

「はい、お願いします。」

「了解、まかしとき！」

ニカッと微笑む彼女はとても頼もしく思えた。傍から見れば俺はとても頼りないように見えるだろうが…。

第十四話 小狼と舞姫（後書き）

お久しぶりですー！！

すみません、執筆途中に寝てしまつて所々グダグダです（蹴
本当に申し訳ございませぬ！！！！

さて、今回ハクさんが受注したクエストですが、概要は次話で判明
します。

上位、ドンドルマに伝令を走らせてハンターを募集しなければなら
ない依頼

おまけにハクさんが使わないと誓つた火竜の防具に素材…。

ア・・・、推測できちやいます！？

さて、今回の後書きですが、皆さんのどのキャラクターが好きかを
教えていただきたいです（蹴

それとキャラクター間のやり取りのリクエストとか…（

BL、レズ、なんでもこいやぁ（黙

それとこんなキャラクターだしてくれよ！！的な要望とか…

こんなモンスターとこんな戦闘をしてくれ！！とか…

とにかくこの小説でしてほしいことをバンバン要求してくださいな
！！

誰も要求してくれなかったらナイチャイマスカラネ！？（´；；

、）ブワッ

第十五話 桜紅葉の並木道

「気をつけるゼヨ。」

「うん、船長こそプーをよろしくね。」

「プイーツー!!」

私は交易船の甲板から身を投げると棧橋に着地し、一直線に酒場へと走り出した。

途中漁師や村人にぶつかり怪訝な顔をされるも、一心不乱に酒場へと。

木製の分厚いドアをくぐり、酒を吸い黒く変色したテーブルを通り過ぎ。

カウンターへとたどり着いた時には目の前には炎が踊っていた。灼熱の炎を思わせるソレが。

「ああ……」

後ろ姿、それも装備に包まれ体が見えなくともわかる。紛れもない彼だ…。

カウンターの受付嬢と何か話しこんでいる。受付嬢は営業スマイルではないハキハキとした笑顔を浮かべているのを見て、彼の罪作りの所は一切治っていないことに気付く。

「あの…ッ。」

声をかけようにも心臓は空気を吸うことを邪魔し、肺からは息が漏れただけ。

何年も会わなかった、胸の痛みが行動を制限し動けない。焦がれていた筈なのに何もできない…。

「いつてらっしゃいませ」 お戻りになられましたら一杯お付き合いますよお」

そんな黄色い声を受けた彼がゆっくりと振り向いた……

「ホノ…力…?」

彼の手からクエスト用紙と思しき紙が落ちてゆく。

「来て…くれたんだ…な…」

ゆつくりと、噛み締めるように、枯れ果てた大地へと水を沁み込ませるように…。彼は呟いた。

ヘルムを脱ぎ、色の抜けた銀髪を振り払う。光の透き通る、狼を思わせるその髪は綺麗だと思う。

「久しぶり…だね、何年も音沙汰なしで船長頼りなんて…」

「あ…ああ、ごめん…」

「……。」

沈黙が支配する。酒場の空気も凍てついたかのように静まった。かと思えば、

「おいッ、桜紅葉の舞姫がいるぞッ！！」

「おいッ、桜紅葉の舞姫がいるぞッ！！」

おいちよつとまで、どこのミーハー野郎だ出てこいせつかくの雰囲気ぶち壊しじゃねえかこん畜生。

酒場の空気が静まり返ったと思えば、彼女紅葉洗コウヨウホノカの有名な二つ名が飛び出てきた。

「えっと…クエスト受けるの…？」

彼女はガン無視し、床に落ちたクエスト用紙を指さす。

「あ、ああ。緊急の《リオレウス討伐》。3日前に指名されて装備つくるのに時間をとってしまったて。」

「私がついていてもいいかな…？」

「あ、ああ…。無茶をしないのであれば…」

酒場の中の野郎共は口ぐちに「可愛い…ッ！！」だの「やっべえ、みなぎってきた」だの

「嫁にしてえよおお！！」だの「けしからんッ」だの叫びだしている。

このあいだ褒めた俺がバカだったよ。獣はどこまでいっても獣か…。叫ぶ野郎共を殺意を込めた目線で黙らせ、クエスト用紙を拾い上げ

る。

カウンターに置き、「一名追加。ホノカ、名前。」受付の中のペンを取り、ホノカに渡す。

名前を書き終えたホノカはなぜか嬉しそうに、「何年ぶりかな…。」なんて頬を赤らめながら

言ってくれちゃってます。俺の頭がどうにかなりそう。

「いつてらっしゃいませ！！帰りの一杯の件は撤回です！！」

あれ？受付嬢なんで怒るの。

「いこ。私の準備は港いけばいいから。」

俺の手を引き、すてと小走りするホノカ。その光景にお返しとばかりに殺意を送る野郎共。

痛い、痛すぎます皆さんすいませんでした。

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ……

「揺れすぎだろ！！！！おい、何があつたんだよ！！！！」

村を出発して、数時間。

普段ならドンドルマへの交通として使う道が。すっごい揺れていました。

「つい最近、イヤンクックが大量発生してねえ…。この付近だけの狭い範囲で発生したもんだから

縄張り争いが激しいのなんの。道は荒れるわ、森は燃えるわ。」

竜車の手綱を引く男が陽気に言った。森の木々は確かに燻っている。怪鳥の火炎液を浴びた所為だろう。

「イヤンクックの大量発生ってドンドルマじゃ、頻繁に張り出されてるけど。結局ハンターが駆逐してるのは全体の数パーセントにも満たないんじゃない？残りの大半は餓死で減少するって聞いたよ。」

ホノカがもふもふしたパンを食べながら言った。はふはふしながら言うんじゃない。けしからん…ッ。

「あと1時間ちよつとで抜けるから我慢してねえい。」

そのままあぐらをかき、頬をかこうとした所でやめる。

レウスアームの指は飛竜の爪のように鋭く、揺れている状態で頬をかこうとすれば大惨事になりかねない。

女の子座りで、真っ白なもふもふしたパンを食べている光景は本当に微笑ましい。

「はふ？」

「いや、なんでもない。」

そういえばホノカと最後に会ったのはいつだったか。胸が少し痛むのを堪えて記憶を洗う。

3年前か…。今思えば3年間止まった生活をしていた。

「ごちそうさまでした。」

両手を合わせ、ホノカは目を閉じて言う。小さい頃のクセがそのままである。

「あの頃から…。どうしてた…？」

ゆっくりと近況を聞いてみることにした。雑誌に取り上げられているのである程度は把握しているが

やはり本人の口から聞くのとでは勝手が違う。

「3年前、あなたに置いていかれて私から探しようがなくなった。

あの頃は皆と違って無名の下位ハンターだったし、もう別の仕事について生きるなんて道はなくなってた。」

ハンターとして生きてしまえば、他の人生への道は閉ざされる。

この世界でよくあることだ。俺はハンターの両親を持ち、自身にハンターとして生きる才能があったからハンターになった。別な理由もあるけれども、ハンターになるしかなかったということもある。

「あなたを探すがてら、放浪しながら各地を転々としてた。」

「上位に上がったのは一年前。リオレイアを倒して、やっと皆に追いつけた。」

「で、その帰り道。早熟な紅葉の並木道を歩いてたら、ハンターに出会った。イヤンクックに追われてて、私はその場で2頭のイヤンクックを討伐した。」

クエスト外でモンスターを討伐してしまうとギルドの処罰を受けるはめになるが、自衛のためせざる負えない場合のみ許される。

「そしたら狩りに生きるの人達で、桜紅葉の舞姫って言われた。で、船長からあなたが呼んでるって

聞いてやってきた。」

「説明あんがと。がんばったんだな……。」

イヤンクック相手にアイルーのような声を上げながら逃げ回っていたあの頃を思い浮かべるとすさまじい成長である。

「あなたは……、その鎧を纏っているということは……もう乗り越えたの？」

「……。今回のクエストの概要を話そうか。」

「今回のクエストは、元々下位のリオレウス討伐依頼だったんだ。」

「だが、下位ハンター4人パーティーが討伐に向かった結果上位級と判明。負傷者を出しながらも

^{ベースキャンプ}拠点までは退避できた。そこで上位ハンターのパーティーが急遽討伐に向かった。」

このリオレウスの生息域は広く、迂闊に^{ベースキャンプ}拠点を出られない状況だった。

「だが、その上位ハンター方もクエスト失敗。計8人が^{ベースキャンプ}拠点で立ち往生してる状態。」

「似てるね……、やっぱりまだ……。」

「このリオレウス、今までよりも動きに無駄がないって報告もある。一応罠や道具は持てるだけ

持ってきてはいるけど正直倒せるかわからない。」

「2連続で火竜のクエストを受けるなんて、夢にも思わなかった。」

「悪い。」

「大丈夫だよ……。」

ふっと、うつむいていた視線を上げると至近距離までホノ力が迫っていた。

いつの間にか揺れはおさまっている。

「……。」

ぎゅっと、互いの鎧の上からも感じ取れる温もりを彼女から受けていた。

「大丈夫…、あなたは強いから…。」

暖かいな…、このまま眠れば悪い夢を見なくてすみそうだ…。

第十五話 桜紅葉の並木道（後書き）

すいません。

とりあえずすいません。

読者の皆さますいません。

担当者すいません。

資料を探してくださった友人方すいません。

わざわざ携帯をタダとも登録してくださった担当者すいません。

アドバイスをくださった皆様すいません。

カプコンのみなさん予約できてませんすいません。

2Gはワンデータしかクリアできていませんすいません。

ネカフエでフロンティアを少ししかやらなかったですすいません。

ホノカの文章書いてにやついてすいません。

あうあうあーっ!!!

えーっと…、とりあえず言い訳を（蹴

ゲンコーから携帯のメールに変更しましたところ担当さんがポチャ

リと携帯を（

仕方なくゲンコーを買いました。

そしたらうたた寝 牛乳こぼしてアッ。

担当者復旧 風邪で寝込んでアッ。

担当者復旧 テスト期間アッ。

テスト終了 先生に怒られパソコンガッ。

とまあ、続いたわけです。

かきだめはちゃんとしてます。

明日帰ったらちゃんとあげておきます。

すいませんでした。

ガオーッ

第十六話 王者の資格

「ほい、荷物の積み下ろしは終了したな！？じゃ、終わったら迎えにくるぜい！！」

竜車を操っていた男はこれでもかと手綱を引き、退散していった。

「で…、どうなってんだコレ。」

^{ベ이스キャン}拠点には情報通り怪我をしているハンターが8名。

医療品も持ち込んでいるため、手当できる。だが

「お、アンタらもこのクエスト受けたのかい？」

いかにも軽薄そうな男がいた。8名は綺麗に手当されていた。

「ああ、二重契約かな？」

「みたいだな。そっちのお嬢さん可愛いねえ、これ終わったらお茶でもどうよ？俺に惚れるまでは奢ってあげるけど？」

「あ、あう。ハク…」

あの、そんな目で見上げてないで。

「残念だけど。で、そちらは一人？」

「いんや、も一人。」

天幕^{テント}から小柄なハンターが出てきた。

「ありや、二重契約か。私たちがドンドルマから派遣されてきたから別の街だね？」

ぱつと見、アイドルでもやっていそうな顔立ち。甘ったるい声。

「にしても、ケルヴァス。またナンパしてたわね？」

「うつ、し…してないぞ？」

「かなり軽い口調でされた…。ハクがいなかったら…。」

ホノカが俯きがちに答えた。

「覚悟はいいわね？」

昼下がりの森丘に一人の青年の悲鳴が木霊した。

「改めて。ハク・スケイス。このクエストで指名されて受注した口

クシエ村のハンターだ。」

「よろしく。俺はケルヴァス・アカツィア。ドンドルマでの緊急クエストだったこのクエストを受注した。こっちはシャルロッテ・メルカ。ランス使いの俺とガンナーのシャル。」

コウヨウホノカ
「紅葉洗、2人そろって太刀使い。」

自己紹介を済ませ、支給品ボックス内の支給品を一瞥する。

「共同戦線として戦うか？」

ケルヴァスが支給品を各自に分けながら言った。提案しながら実行するとは強引である。

「ああ、よろしく頼む。報酬は均等でいいよな。」

「ああ。」

「じゃあ打ち合わせといくか。」

地図を広げ、円陣を組む。負傷したハンター達も参加している。

「今回のリオレウスは、基本的に飛竜が降り立たないフィールドの上空をも飛び回っている。」

うちのメンバーも一人、上空からのプレスでやられた。」

後に派遣された上位ハンター達のリーダーと思しき男が説明する。

「サイズもでかい。動きも恐ろしく俊敏でまともに近づくことさえできなかった。」

ここで下位ハンターへと移り変わる。

「俺達は運よく大地に降り立っている時に遭遇できたんだ。早速死角から閃光玉を投げ込んだ。」

後の流れはこうだ。

目をくらまされてリオレウスがのたうちまわっている合間に、罠を2つ設置。

視力を取り戻したりリオレウスが怒号を上げ、罠へと突っ込み身動きが取れなくなった所で

大タル爆弾を4つずつ、計8個で吹き飛ばした。基本的な下位種であれば甲殻が吹き飛び、

別エリアへと移動するか、巢へと戻り眠るほどの威力である。

「でもあいつは、ピンピンしてやがった。甲殻は吹き飛ばせることもできずに、あとは蹂躪されるがまま。」

「ドンドルマで聞いた情報はキングサイズの上位リオレウスってだけだったぞ。」

「陣形を真面目に検討する必要があるな……。」

太刀が2人、ランスが一人、ガンナーが一人。

「私とケルヴァスが囷になるわ。角笛も持ってきているし。」

「いつもの狩りだな。お互いを囷にダメージを与えていく。」

「じゃあ俺達は後方から。可能であれば尻尾の切断も。」

リオレウスの尾は長い。下手な防具であれば肋骨が粉碎され、即死するほどの威力をもつ。

それを断つことでどれだけ生還率があがることか。それに甲殻と違い、飛竜の回復力を持つてしてでも

断たれた尾を全復させることは不可能だ。長い目で見れば回復するかもしれないが、回復する前に

他の火竜との縄張り争いで敗北することは確実だろう。

「携帯砥石は俺は2つ。太刀のお前らは3つずつもっておけ。」

「応急薬も剣士のあなたたちに。弾丸系は私がいただくね。」

「道具類は何を持ってきた？こっちは罠が調合分含め8つ。大タル爆弾が6つ。閃光玉10つだ。」

「戦争でもおっぱじめる気かい？こっちも罠は8つ。爆弾は2つ。」

閃光玉はシャルが3つ。」

「道具が尽きれば、戦いは苦しくなる。もし、道具類がなくなれば危険を伴うが採取で補おう。」

「了解だ。そっちのお嬢さんも彼の言うことに異論はないな？」

「ハクの作戦は大丈夫。」

「わお、すごい信頼だねえ羨ましい限りで。」

「ケルヴァス？」

「ごめんなさい。」

ケルヴァスという青年が必死に土下座している。

シャルロッテという少女はガミガミ怒鳴りつけながら、ボカスカとケルヴァスを殴る。

ホノカはといえば携帯食料を飲み込んだはいいがむせ込み、必死に水筒の水を流し込んでいる。

こんな平和な光景は何年ぶりだったろう…。

第十六話 王者の資格（後書き）

はい、今回は狩りの打ち合わせと二重契約でなんとかジंकスセーフっていう（ry

ケルヴァスさん。某機動戦士の某「狙い撃つぜ！！」が口癖の彼がイメージだったりします。

シャルロットさんは手綱というか首輪をつなげたケルヴァスをしつける役目（蹴

今回はハクくんの過去についてです！。

ああ、テストが間近だ…。

ネムイ…

第十七話 空虚と絶望

音を立てて風が吹き抜ける。温暖な気候に水源も豊富なアルコリス地方。その森丘。

ベースキャンプ
拠点を出てすぐのエリア1と呼ばれる区画には、アプトノスが警戒しながら

草を食んでいた。

「やっぱりいつもと様子が違うな。」

ケルヴァスが呟く。確かにアプトノスは忙しなく首を上空へ向けている。

「上空からの攻撃に警戒してる……。」

「リオレウスの搜索、空は俺とホノカが引き受ける。2人は地上を頼む。」

「了解だ。さて、楽しい狩りで行こうか。」

そうして俺達はリオレウスの搜索を始めた。

「うわーお……。デケエなコイツア……。」

「だね。」

ケルヴァスとシャルロッテが岩壁から顔を出し、エリアの中央にて君臨するリオレウスを観察していた。エリア4。飛竜の巣へと続くエリアのひとつで入り口と巣へと続く洞窟を除けば崖になっている。結構な広さがあり、飛竜が降り立てるフィールドでもある。

「……大丈夫？」

ホノカが心配そうな顔を向ける。

「いや……問題……ない……。」

「おいおい、始める前にビビったか？」

「軽口をたたくな。いくぞ……ッ……！」

肩の柄に右手をかけた状態で身を低くし走り出す。足元で地面を抉る音がする。勢いを乗せて突貫した。

続いてホノカ。シャルロッテはその場でボウガンを構える。ケルヴァスはランスを構え、突撃する。

幸い、リオレウスはこちらに背を向けており気付かれていない。

確かにでかい。下位級であれば軽く凌駕している。上位級だとしても最大級を超えているのではなからうか。堅固な鎧に身を包み、燃え上がる炎を連想させる紅^{アカ}。

俺と同じ紅^{アカ}。やってやる、何がなんでも。

待っていたかのように火竜が振り向き、咆哮をあげた。

「グガアアアアアアアッ！！！！」

君臨する王に相応しい雄叫びを上げた後、首をもたげ灼熱のプレスを放った。

「ッ。」

跳躍。真横を数千度はあろうかという火球が通り過ぎていく。だが、足を止めずに突き進む。

威圧感を全身から出し、誇り高き威厳を解き放つ。そして火竜が怒^{バイン}号を放った。

「ガアアアアアアアアッ！！！！」

大丈夫だ。俺には耳栓スキルがついている。効果などないはずだった

「ッ！！！！」

膝が震えだす。蹴躓いて転んでしまった。立たなければ

立ち上がろうと地面に手をつけるがどうしようもなく震えて力が入らない。

胃が痙攣し、先ほど食べた携帯食料を吐きだそうとする。

「ッ！！！！」

レウスグリーブが汚れるのも構わずに手を口元にやった。

「ッ」

嘔吐して、胃が空になっても痙攣はおさまらず震えも止まらない。

「どうした！！」

異変に気付いたケルヴァスが叫んだ。

「やっぱり…ッ…！」

「閃光玉を使う…！」

ケルヴァスが閃光玉を放り投げ、世界を一瞬白く塗りつぶした。リオレウスは苦悶の声を上げ、のたうちまわる。

「逃げるぞ…！肩借りるぜ！」

ケルヴァスとホノカに肩を担がれ、連れ出される。

振り向くとそこには怒りを込めた怒号を放つ火竜が君臨していた…。

「どうしたんだ？」

ヘルムを外され、震える肩にはホノカが手を置いてくれている。

玉のような汗をかき、体は寒さに震える。

「ハアッ…、ハアッ…。」

ふと肩に置かれた温もりがなくなった、と感じた時には頬に衝撃が走った。

「しっかりして…！確かにあれは悲劇だったけれど、いつまで震えてるつもり…？」

だが、震えが止まらない。

パンツ、パンツと柔らかい物をはたく音が連続で鳴る。

「おい、やり過ぎだつて…！」

「そうよ…！いくら何でも」

「彼の精神状況を知らずによく言えるわね…？」

「…、いいんだホノカ…。」

そう呟いて俺はゆっくりと立ち上がった。膝は今も震え、崩れ落ちそうだが力を入れる。

「再開しよう…、消費したのは閃光玉ひとつであつてるよな…。な
ら問題ない、エリア移動していいようだしもう一度」

「馬鹿か？チームメンバーがこんな状態でまともな狩猟ができると
本気で思ってるのか？」

「ならいい。俺一人でやる。迷惑はかけれないからな。報酬はもつ

ていつてくれてかまわない。

ベースキャンブ
拠点で待機していてくれ。」

そう言い残し歩き出す。が、肩を掴まれた。

「ちよつとム力ついたぜ、ガキのお守りは趣味じゃねえんだがな。」

「なっ
」

頬に重い衝撃を受けたと思った途端壁に打ち付けられた。

「ケルヴァスッ！！！」

シャルロットに悲鳴が響く。

「お前、いくら上位ハンターで二重契約の即席パーティーだとしてもなあ！！勝手な行動と抱え込むような行為は俺がいるパーティーじゃ許せねえんだよッ！！！」

言葉の切れ目切れ目で衝撃と痛みが走る。

「こんのッ！！」

振りかぶられた腕を握り、足で胴体をすくいあげ巴投げの要領で放り投げる。

そして転ぶケルヴァスに馬乗りになり、叫ぶと同時に殴った。

「お前は！！目の前で仲間が！！喰い殺されるのを見たことがあるのかッ！！！何もできない無力感と絶望感を感じたことがあるのかッ！！！」

喉が裂けそうな痛みを訴えるが無視して叫ぶ。

「ねえな！！だけどよ！！お前はそいつらに助けられたんだろ！！報いようとは思わねえのか！！」

ゴロゴロ転がって、殴り合つて。投げて、蹴飛ばして。

「思ったさ！！何度も！！でも残ったのはただ寒い空虚だけだった！！！！何度倒しても！！！！何度救っても！！！」

互いのグリーブの籠手部分や棘で頬や首筋が切れ、血が流れ出していた。

「いつまで倒せばいい！？いつまで救い続ければいい！？そんな俺が死ぬまで、永遠にも思える長い時間をいつまで彷徨えばいい！！」

ケルヴアスの頬へと突進していく拳から力がぬけた。頬に届く前にブラリと垂れ下がる。

「いつまで続けても皆戻ってこないんだよ……。終わってしまったんだ、全部……」

「……」

2人して座り込むと事の末を見守っていたホノカとシャルロツテが近づいてきた。

「おーおー、随分とやり合ったわねえ。ケルヴアス、アンタこんなに熱くなつたの初めてじゃない？」

「酷いケガ……。今までハンターやってきて一番怪我してる……」

2人共勝手なことを言い合う。

「戻ってこないから。だから無意味ってことか？」

ケルヴアスが息を荒げたまま言う。

「無意味だろ……。戻ってこない、減るだけだ。」

「……聞かせてくれないか。何があったか。」

第十七話 空虚と絶望（後書き）

すいません><

まさかのテスト期間（

え？予想できたらうって？

あうあうあ（

ですがテスト期間ながら書きだめておいたので
明日過去編をお送り致します！

登場人物紹介・サブキャラクター編・（前書き）

サブキャラクターなのでその他諸々と用語を乗せようかと）

登場人物紹介・サブキャラクター編

- 受付嬢 -

口調は - 3 t r i - の受付嬢（爆

10代なのにロクシエのギルドの実質ナンバー2。

私服は多彩で何故かメイド服やゴスロリやごによごと本当により多彩。

リオに着せて、ハクに見せたらどんなリアクションするだろう…とか会話でもたまにでてる

変態発言が傷な娘。可愛いのに…ッ！！変態な成分が（蹴

- 村長 -

交易で発展した町ロクシエを束ねる村長。白髪で小柄。村長にしては珍しく竜人じゃない。

羊羹大好物でおばあちゃんの愛称で茶菓子屋を経営してたり。

リオとよくお茶する。

ちなみに現役時代はモテモテだった…らしい。80代じゃもう面影も辿れない…かな？

- 酒場のオッサンハンター達 -

変態な猛者ばかり。下位ハンターが大半だが、上位ハンターもほんの少し混じっている。

ちなみに腕前は確かだったりする。

おっさんなのでほとんどが30代後半からなのだが、ほとんどが現役バリバリのベテラン揃い。

変態だが正義感だけは強いので、ロクシェは今日も平和です。

- フェシリー・ハレビー -

20代後半の独身なないすばでい。

工房にこもりつきりだったりするので肌はすごく綺麗だったり。

ロクシェーの鍛冶屋で、飛竜刀を丸一日で仕上げたり。

髪は普段結ってるが、切ってないだけですごく長い。そして綺麗（殴

- バンス・フィルガー -

村の防衛を一任されている元ハンター。彼が中心となってロクシェのハンターを指揮して防衛することも

しばしば。常時は村の絶壁の切れ目を通行する門番をまとめている。ランス使い。

- 門番 -

30人くらいの規模。元ハンターだったり、どこかの国の兵士だったり。

皆ハンターの武器を装備してたりするので、防衛もお手の物。

- お姉さん？え？お兄さん？！ -

ロクシェでハンターが問題を起こした場合にギルドナイトへと引き

渡す前に拘束する性別不能な方。

筋骨隆々でスキンヘッドなのに何故か胸がある。チャイナ服と胴着を混ぜ込んだ服を着ており怖い。

受付嬢と仲が良く、服を作ってあげたりしてるそう。

- 船長 -

3triでできた竜人族な坂本龍馬（蹴

しゃべり方は語尾がゼヨなだけで決して土佐弁で「ぴすとーる」なんて言ったりしない。たぶん

色々な作品で出てくるので3triの大陸やドンドルマなどの街を行き来してたりしてる模様。

紅葉響こうようひびく
- 紅葉響 -

この作品のキーマンの存在。

ランス使い。ちなみにハクの偽名の名付け親。某歌うプログラムの青い髪のお兄さんを連想していただければ…。無理か。

- プー -

注意 某デイズーの黄色いハチミツ大好きなくまのぬいぐるみではありません。

ホノカのペットのプーギー。豚と発言するとホノカに切り刻まれます。

水に浮かぶ、スーパール並に跳ねる、お腹の揺れ方ハンパナイ。ホノカの甘やかせ方が浮き彫りになるメタb…ゲフン。豊満な体系。

- フィールド -

- ルヴァ森林 -

ロクシェの周りを囲む絶壁の向こうに広がる森林地帯。
年中温暖ではなく、比較的四季がはっきりしている。
ここで取れるキノコは絶品だそう。

登場人物紹介・サブキャラクター編・（後書き）

かなり駆け足でかいてしまいましたが、年齢とかは…各自のご判断を（爆）

かなああり暗いです。次回。

ドズビガーンてな感じで暗いです。

多少グロテスクな描写があるかもです。ホント描いてて食道あたりがもやもや。

にしても、昨日のアクセスが1500名を突破してまして見間違いないかと

かなり心配致しました。

評価は更新する度に上がっていつておりますし…。

あの、こんな評価もらっちゃっていいのでしょうか（蹴

学校の先生に何かかいてるの？って作文片手に言われた時には口づぐみました。

リアルの方にはあまり見せられないですしね（

妄想に妄想を重ねた妄想の極限の妄想なんて（

はい、日本語がおかしいです。

さて、最近担当さんがうきうきしておられます。彼氏さんでもできたのでしょうか。ただし、人の髪の毛をシュシュでくるのだけはいただけません。

まあ女装を強要しないのでまだいいのですが。

「着ないかい？」って提案するはやめていただきたい。提案でとどまっているだけ

まだマシですが…。

周囲の人が個性的な方ばかりな気がしてきました。

さて、ここまでならだら書きましたが何を思ったか謝辞を。

某Kさん。モンハン2G攻略のお付き合いを強要して申し訳ないです。

やつとランポスを空中切りで切断するプレイヤースキルが備わりました。

あとはレウスの突撃に溜め切りでブレーキかけさせるスキルも。

HSさん。作者の代わりに設定の収集お疲れ様です。当分活用することはないでしょうが。

Bさん。書いてる途中にひゃっほーって携帯で電話かけるのやめましょう。

担当さん。いつもお忙しい中指摘ありがとうございます。

彼氏さんとうまくいくようお祈りしておきます。

ただ男を女装させる願望は捨てたほうがよいかと。彼氏さんの名誉のために。

最後に読者の皆さま、こんな私をお気に入り登録してくださっている作者の皆さま。そうだ、モンハンを書こう！と田舎に泊まるノリで書き始めた駄文も

もう少して早一年。一年で30話にも行かない気がしないでもない不定期更新に

お付き合いのご評価何と申し上げたらよいことか。

しろくまのぬいぐるみをもぎゅーとして感謝の気持ちを届けたいと思います。

年末は元旦の0カウント時に更新したいと願っておりますので現在かなりの量を書きすすめております。

懇談？え？何それおいしいの？アッー！（

第十八話 城塞都市ドンドルマ（前書き）

執筆遅れ、申し訳ありません。

テストに次ぐテスト、編集部の担当さんのように誤字の指摘、モンハンの資料収集を手がけてくださったお姉さんが引越されたのを機にかはどうかわかりませんが
思うように文章が浮かばず…。

今まで自然と湧き出ていたのですが、搾り出すような形になってしまいました。

なので5話あたりまで書いた原稿をすべて没にして、再出発という形をとりましたところここまで更新が遅くなってしまいました。
楽しみにしてくださった皆様、本当に申し訳ございません。

第十八話 城塞都市ドンドルマ

「人多い…。どうにかして…。」

「って言われても、ドンドルマなんだから仕方ないよ。ヴェルドはハンターよりもロイヤルナイツの人達のほうが多いし、人口もここまで密集してないし。」

「説明はいい…。どこか休む場所…。」

「10分前に休んだよね。酒場まであと少しなんだから我慢してね。」

「一人前のハンターが身につける防具のひとつ『バトルシリーズ』を身に付けた少年と少女が、人ごみで賑わうドンドルマの街並みを歩いていた。」

「人多い…。助けて…。」

「ドンドルマだから仕方ないよ、もうすぐだから我慢してね。」

10歳を過ぎたばかりだろうか。そんな小さな子供がハンターとしては一人前の防具バトルシリーズを身に纏い、男用の小さい防具を着た子供は大人の背丈ほどある大剣フレイスブレイドを背に担いでいる。赤を基調とした男防具に可変型の大剣、ヘルムからこぼれ出る艶々と輝く長い銀髪は不釣り合いにも少女を思わせる。

一方緑を基調とした女防具に身を包む少女は同じく大人の背丈ほどある細長い太刀『鉄刀 楔』を

背に負っていた。少年と同じく黒い長髪はヘルムから零れ、朝光に煌々と輝く。

少年が少女をリードし、人ごみをかき分けていく。そんな微笑ましい光景だが、道行く人は顔に疑問を浮かべる。どうしてこんな子供が？

通りすがりの人々の疑問を知る由もなく、2人はドンドルマ中心部の酒場へと目指す。

ドンドルマ

大陸中央部に位置する巨大な岩山。

その山を利用し、古龍に対する要塞を築き上げたのがこの街である。坂の上に建つ街の中央部にギルド本部が置かれる。街のあちこちに古龍迎撃用砲台バリスタが設置され、有事の際火を吹き街を脅威から守っている。

龍に対する設備であり、凄まじい統制により各国の軍ですら手出しができない。

そんな街に二人はやってきた。

簡単だ。2人が今まで住んでいたヴェルドではロイヤルナイツのおかげで実質ハンターの仕事などない。

仕事があればハンターは廃れる。腕も、志も。

幼い2人にそんなことはわからずとも、貯蓄の問題も有ってドンドルマへと旅立ったのだ。

「ここが……。」

少女が呟く。巨大な扉。漏れ出る騒ぎ。酒の臭いに肉の脂の香り。

「ハンター最大の拠点、シュレイド地方ドンドルマハンターズギルド本部。」

少年が続いた。そして歩みを進めて扉に手をあてる。鈍い音と共に扉は開いた。

ズラツと並ぶ4人掛けテーブル。豪快に酒を飲み、談笑する者たち。沈んだ状態で酒を飲む者達。

「がっはっは！！我にかなう力自慢はいないかあッ！！でてこい臆病者ども！！！」

大きな樽の側で吠えたける大男。

「……行ってこないの？」

少女が少年に質問をかけた。

「勝てると思う？」

「うん。」

「即答かい。まあ、登録が終わったら行くことも考える。」

「かつこいいとこ見せてね…。」

少年は照れ笑いを浮かべながら受付へと向かった。

「王都のハンター、飛竜討伐経験は1回。…フルフル、すごいわね。」

「そんなことないですよ。ほとんど先輩方のお手伝いみたいな感じでしたし。」

受付嬢へギルドカードを提示し、この街へ登録してもらった作業中。

カウンターでホノカはアイスクリームをパクついていた。

「おいしい？」

少年が聞くと嬉しそうに微笑むその姿は天使のように儼い。

「二人して可愛いわね…。はい、登録完了。これからこの街でのクエストは私に言ってくれば斡旋するわよ、なんたってこんなに可愛いんですものお…！」

受付嬢はカウンターから身を乗り出し、二人を抱きしめた。

「…ふえっ!？」

ホノカはビクツと飛び上がり、少年は苦笑を浮かべる。

「僕は男なんですけどね…。」

「取り乱してごめんなさい…。」

「いえいえ、そんな。」

「…ノン、気持ちよかった。」

「もう！ホノカちゃんそんなこと言っちゃだめでしょお…！」

ホノカの一言にくねくねと己の身を抱きしめる受付嬢ノン。

「…クエスト紹介してただけですか？」

思わず耐え切れなくなり少年がつぶやく。

「あ…、ごめん！忘れてた…！」

慌ててカウンターから依頼書の束を差し出す。

「特産キノコ…、コンガ…、ランポス…、…イヤンクック。」

依頼書に目を通す少年の手が止まった。

「フルフル倒したあなた達2人ならオススメよ。一番初級な飛竜への登竜門でもあるしね。」

鳥竜種であるイヤンクックは体格、攻撃方法が飛竜に酷似しているため、昔は飛竜に分類されていた。

「…受ける？…倒す？」

ホノカが黒髪を揺らしながら首をかしげる。

「そうしようか？」

「…うん。」

「ではクエスト契約料200ゼニ頂きます！！うけたまりましたーっ！！出発は1時間後ですのでそれまでに竜車発着所へ！」

無駄に営業スマイルなノンへ手を振り、僕たちはドンドルマ初のクエストへ出発した。

第十八話 城塞都市ドンドルマ（後書き）

短いですが、本当に短いです。

基本中の基本イヤンクックをやって、再出発していこうと考えました。

リオレウス討伐編は過去編をある程度消化してから出発になります。

東北大震災、私の地域は関西ですが放射線パニックは小規模で起こっています。

テレビで言う放射能は、放射線を出す物質の放射線をどれだけ出せるかの能力の略称です。放射線を出す放射性物質が飛んでこない限り被爆しません。

物資の買占めは復興を遅らせます。物流を変えます。

不安だとしてもいつもどおりを心がけてください。

もし、原発が核爆発を起こしたとしてもパニックさえ起こさなければ犠牲者を減らすことができます。

ただの学生が偉そうに語っていますが、被災地以外の皆様のパニックは

被災地の方の精神をまいらせます。

ツイッターなどでのチェーン、チェーンメールなどは正しいと思ってもまわさないでください。そんなメールで送るくらいならちゃんとメディアを通じて発表します。

チェーンメールを使ったスピードとメディアを通じたスピードなら不安の煽りや速度を鑑みてもチェーンメールを使うようなことは一切ありません。

何があつたとしてもメディアを通じます。

なのでチェーンメールなどが来ても絶対にまわさないでください。

：米軍の気象兵器が今回の地震を起こした、などのデマも広がっていますが
起こせる原理は確かにあります。が、起こすメリットがありません
ので。

自然災害として割り切れなどとはいいたませんが、惑わされないでください。

第十九話 怪鳥は追い回す

「…」

「おいしい？」

「うん」

少年は嬉しそうにはにかみながら少女を見る。こんがり肉を小さな口ではおぼっている少女は目を細めながら歩く。

やはり香草を荷物にもっておいてよかった、と思いながら自分の肉にかぶりついた。

「食べ終わったら骨埋めて、脂はこのタオルで拭いてね。」

少女にタオルを渡して、既に食べ終わった肉の骨は土を掘って埋める。

これでモンスターは寄ってこないはずだ。…多分。

「ご馳走様。」

骨を埋めて、いつの間にか隣に駆け寄ってきた少女。可愛い顔の口元にはぬるぬる光る脂。

「ほら、タオル貸して。」

少年は少女の柔らかそうな口をむにむにと拭いてやる。少女ははにかむ。

「じゃあ、いこっか。ピンクの大きな鳥さんを。」

「ん…。」

年に不釣り合いな格好、『バトルシリーズ』を着た2人は歩き出した。

胸くらいまでの高さの草原、数本の木が生えたエリアに入ると、少女が足を止めた。

そして空を指差す。

「クエア！！クエア！！」

独特の鳴き声をあげながら翼を上下させ、上空へと進入してくる桃色。

小さな点だったそれがやがて細部まで見渡せるようになる。

- 怪鳥イャンクック -

鳥竜種に分類されるこのモンスターはミミズを主食とする。スコツプのようなクチバシ、巨大な耳。

そして桃色の鱗。翼に張った翼膜は青色でコントラストを醸し出す。可燃性の液体を吐き出したりするため、近年までは飛竜に分類されていた。

「よし、いこうかつ。幸いまだ気づかれていない。僕は真正面から、ホノ力は後ろの草に隠れてて。

僕が一撃加えたら一気に攻撃。」

名前を呼ばれた瞬間唇を微笑ませ、草原に走り出す少女。

「さつてと、僕の大剣でどこまで戦えるかな？」

自分の背を上回る剣の柄に手をかけ、少年は降下してくる怪鳥の正面に立つ。そして柄を引き抜き、捻じりロックを掛け内臓刃を飛び出させ力を練り始めた。

「クエア！！！！」

小さな敵を見つけた瞬間、怪鳥は奇声を上げた。そして…、着地。

「はああああああ！！！！」

小さな体の筋肉を全力まで捻じり、溜め、増幅させた力は獣のアギトのような剣を振りかぶる。

真正面に捉えられた怪鳥はそれが自分の肉を食い込み、切り裂き、引きちぎるのを認識するのに時間がかかった。

「クエアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

巨大な一撃にたたたらを踏み、数歩後ずさる怪鳥。

追い討ちが如く、左から右へ、下から上へ、また牙のような刃が襲ってくる。

彼は、自分の体を守るために攻勢に出ようとした。

「はあっ!!」

後ろで聞こえる音。風切音。そして感じる翼への痛み。切り裂かれる翼膜の感覚。

「クエア!!」

まさか後ろにも居るとは…。前からは頭部を執拗に攻撃され、既に傷を負っている。

なのに後ろから薄い翼を斬られるとは思いもしなかった。

だめだ、このままでは負ける。そう、本能が彼を奮い立たせた。

「クアアアアアアアッ!!!!」

翼を大きく広げ、2足歩行のようなポーズをとり奇声をあげる怪鳥を前に少年は声を張り上げた。

「一旦距離を置く!!! 怒り状態じゃ動きが早すぎて有効打は望めない!!!」

「うん!!」

連携したかのように怪鳥の攻撃範囲の外をぐるぐる回りだす2人。

怪鳥はうっとうしく感じたか、少年に対して加速しながらの体当たりを決行した。

にやりと笑った少年は横に回避、後ろから少女がペイントボールを投擲し桃色の体をより濃く染め上げた。

制動のかからない怪鳥はそのまま突っ込んだ。加速が体を押し倒し地面を滑り、壁に激突してとまった。

何度もぶつかれば脳震盪を起こし、ハンマーのスタンと同じ状態に落とせるはずだ。

「もっと攻めるよ!!! 頭部の部位破壊もあと少しがんばれば!!!」

少年が声を上げて後ろから大剣で切りかかる。少女は少しはなれたところで太刀を振るう。

「クエアアアア……！」

立ち上がった怪鳥。こちらを振り向いた顔は、クチバシの隙間から火炎液を漏らしうなっている。

「また距離を……！」

そういおうとした瞬間だった。森に生えている木々に匹敵する太さをもった尻尾がしなりながら近づいてきていた。

咄嗟に地面を蹴飛ばす。尻尾と反対方向へと。

「きやあっ……！」

少女の悲鳴が聞こえた瞬間、少年の体を激痛が襲った。

第十九話 怪鳥は追い回す（後書き）

受験生はめんどくさい…。

更新が日に日にズレていく今日。

…高校決めてないや（あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7313l/>

Monster Hunter!

2011年6月24日18時38分発行